
生徒会長のSはSのS

・° +くま+° ・

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生徒会長のSはSのS

【Nコード】

N7071D

【作者名】

・°+くま+・

【あらすじ】

親の離婚により転校する事になった涼子、だが転校先の生徒会長に気に入られてしまった涼子は、生徒会長のペットになる事に・・・

(1)

じりじりとコンクリートを容赦無く照りつける太陽は、今日も手加減無しに温度を上げていった

「あゝ暑いッ！！！何なのよこの暑さッ！」

何もしていなくても汗が出る程熱い今日は、彼女の機嫌を余計に悪くさせた

彼女の名前は広田涼子ひろた りょうこ今涼子のイライラ度は、MAXだった

涼子をイライラさせる理由は、3つあった・・

涼子の親が3カ月前に離婚し、母の方についていく事になった為、涼子は友達と別れなければならかった事がまず一つ

2つ目は、想像していたよりも涼子が今日から通う学校が広くこの歳になって迷子になってしまった事

そして最後の3つ目が、実はこの学校は寮生だった事をさっき知らされた事

泣きたくなるのを押さえ、必死で職員室を探す涼子

今は、丁度授業時間らしく、廊下に出ている生徒は誰一人として居なかった

すると、校舎の一角に赤いカーペットが敷いてある廊下を見つけた

興味本位で涼子は、その赤いカーペットの先へと進む

一番奥には、大きな扉があり、周りは大理石で作られた銅像が幾つも並んでいた

「凄い所・・・本当に此处学校なの・・・??」

あまりの凄さに独り言を吐く涼子をじっと見つめている男が一人

「お前・・・・・・・・ダレ・・・・・・・・?」

急に声を掛けられビックリしながら後ろを見た涼子は、もっとビックリする事になった

目の前には、俳優やアイドルと言っても可笑しくないような美形の男が立っていたからだ

高い身長に小さな顔、今時珍しい、整髪飲料などをつけていない綺麗な黒い髪の毛飾っていない黒い眼鏡は、目の前の美形男子生徒をイケメン優等生に仕立て上げた

「え・・・・・・・・と・・・・・・・・あの」

イケメンを前にして、声が震えて裏返りそうになる涼子

顔が赤くなるのが自分でも分かるほど、良子の体温は上昇していた

「此处は、生徒会専用フロアだぞ」

そんな涼子のドキドキを目の前のイケメン優等生は凍りつかせるかのように、冷たい表情を向ける

先程まで暑かったはずの校舎がひんやりと肌寒さを感じた

(2)

「おい、聞いているのか?! 早く授業に戻れ」

あまりの顔とのギャップに驚き声も出ない涼子にまた、あの冷たい視線を送る美男子

容姿だけで言えば、成績優秀容姿抜群超モテモテ眼鏡男子

なんてタイトルがつけられそうなのだが、口を開けば人を見下す最低男とゆうタイトルがつくだろう

涼子は、小さく溜息を漏らし【人を見下す最低男】に背を向け立ち去ろうとした時

「オイ・・・! ちょっと待てよ! そっちは・・・!!」

さっきまでは、授業に戻れたのなんなの言っておきながら次は、引き止めて来る【最低矛盾男】に涼子は、ついにキレた

「アンタ一体何なのよッ?! 戻れって言ったり、待てって言ったり! ...!! いい加減にしてよね!!」

息を切らし、【最低矛盾男】を睨み付ける涼子

ふんっ! こうゆう俺モテるから何しても許されます的な最低男には、コレぐらい言ってやらないと!

気が強く負けず嫌いな涼子は、勝ち誇った顔で、微笑を含ませていた

そんな涼子に向かって【最低矛盾男】は少し驚いた顔をして

「お前、誰にその口利いてるか分かってんの？」

最低矛盾男は、相変わらずの冷たい視線と表情一つ変えない顔を涼子に向けるが涼子も負けるものかと

「そんなの知るわけないでしょ！大体あんた初対面の女の子に向かって何て失礼な奴なのッ？！！」

と、説教する始末

まるで姑のように怒鳴り散らす涼子を見ていきなり笑い出す【最低矛盾男】

無表情の最低男なんかじゃなく、一人の無邪気に笑う美男子

こんな、可愛い笑顔もできるんじゃないん……

ッて！！何アタシ【最低矛盾男】の事褒めてるのよ！！性格は、最悪なんだから、騙されちゃ駄目よアタシ！！

一人心の中突っ込む涼子に無邪気な笑顔を向ける美男子は、笑いを必死に堪え

「お前面白いな、笑わしてくれたお礼に、良い事教えてやるよ、俺は此処のガッコーの“生徒会長”だ」

………

涼子の頭の中は、真っ白になっていた

(3)

「せ……生徒会長……？」

目を大きく見開き啞然とする涼子

「それに、俺の親父理事長だから、生徒の1人や2人退学にさせるのも、簡単なんだよね」

不気味な笑みを浮かべ涼子の頬に手を当てる【最低矛盾生徒会長】

此処で謝っておけばよかったものの、負けず嫌いな涼子は、自分の頬を触っている手を振り払い

「アタシを退学させたきゃ勝手にすれば？
アンタみたいのが生徒会長やってる学校なんてこっちから、願下げよう！！！！」

奥の部屋まで聞えるぐらい大きな声で怒鳴りつける

しかし、涼子の体はわずかではあったが震えていた
いくら、気の強い涼子だって怖いものは怖い

そんな涼子の姿を見た【最低矛盾生徒会長】は、再び涙がでるぐらい大笑いし始めた

「ちょっと！！！何また笑ってるのよ！ちょっと、聞いているの？！

「！」

涙を少し浮かべながら、涼子は怒り出す

それを見た最低矛盾生徒会長は、また笑い出す

「お前まるで、百面相みてえだな、本当面白れー奴、退学には、しねーから安心しろ」

涼子は、その言葉にホッと安心し、胸を撫で下ろした

しかし、それだけでは、涼子の怒りは収まらない

「最低矛盾生徒会長」

ボソッと悪口を言って最低矛盾生徒会長の前から立ち去ろうと小走りで走っていくと

「オイ！！待てよ！！そっちは・・・・」

最低矛盾生徒会長がまた、涼子を止めようとするが涼子は、それをシカトし進んでいく

「危ないッ！！！！」

そう叫んだ時だった

「
キ
ヤ

ッ
! ! ! !
」

(4)

「ん．．．んっ．．．．．」

涼子が目を覚ますとやけに、白い天井が目に入る

此処は、何処．．．．．??

「うつ．．．．．」

起き上がろうとすると全身に激しい痛みが襲った

痛みを堪え、ベッドから起きるとそこには、【最低矛盾生徒会長】
が立っていた

「旧校舎は、脆くなって、床とか抜けるからこれからは、気をつけ
るよ」

難しそうな分厚い本を閉じ、目だけを涼子の方に向ける【最低矛盾
生徒会長】

そつだ、自分はさっきこの【最低矛盾生徒会長】が止めるのを無視
し、そのまま進み、床が抜けて落っこちた事思い出す
時計に目をやると、良子は、2時間も寝ていたことにビックリした、
それと同時に疑問が一つ

「も……もしかして……アンタあたしが起きるの待っててくれたの……?？」

思い切って涼子は、聞いてみた、

「アホかお前、俺様がそんな優しい事すると思つか? お前が起きるのを待ってたのは、ただ授業サボる口実だ馬鹿」

最後にちゃっかりと悪口を言っただけ、本に目を戻す【最低矛盾生徒会長】

やっぱ、コイツ性格最悪……!!!!!!

涼子は、何とか気合で体を無理矢理起こすと靴を履き始める

「おい、何処行くんだよ」

ちらりと本から視線をずらし涼子の方を見る【最低矛盾生徒会長】

「職員室よ、転校初日から、あんたのせいでアタシ大遅刻じゃない」

さっき、アホと馬鹿って言われたのを根に持っていた涼子は、“あんたのせいで”とゆう言葉を強調した

「……やっぱ転校生かどうりで見た事無い顔だと思った」

こんどは、じつと見つめてくる【最低矛盾生徒会長】に涼子は、少し顔を赤らめた

「お前……名前は………?？」

「名前を聞く時は、普通自分から名乗るでしょ、そんな事も知らないの？」

赤くなつた顔を見られたくない涼子は、少し馬鹿にした感じの言い方をして顔をふいと背ける

「……俺は、この学校の生徒会長はがしほや芳賀翼

涼子の言った通り自分の名前を言う【最低矛盾生徒会長】いや、芳賀翼

「アタシは、広田 涼子」

相変わらず、目を背けたまま保健室を出ようとした時

「涼子さ、職員室の場所分かんのか？」

急に自分の名前をやばれ、ビクツと体をさせる涼子

「このガッコー無駄に広いじゃん?？」

本にしおりを挟みこつちに向かつてくる【最低矛盾生徒会長】

「俺様が連れてってやるよ」

しょうがないので涼子は【最低矛盾生徒会長】についていく事にした

(5)

「えーと此処が資料室で隣が美術室」

「・・・・・・・・・・。」

私、広田涼子は、この【最低矛盾生徒会長】に校内案内をしてもらっているわけだけど・・・・・・・・

何でこの学校こんな無駄に広いのよッ???!!!!!!

何か、中庭とかもあるし、校内に雑貨屋や、オシャレな喫茶店まであるって・・・・・・・・

「涼子着いたぞ、此処が職員室だ」

「あ・・・ありがとう」

適当に【最低矛盾生徒会長】にお礼をし、職員室をノックする

「失礼します。」

「広田さん!!!!アナタ転校そうそう遅刻なんて不真面目にも程がありますッ!!!!!!」

いきなり、説教をされ声もでない涼子をよそに、目の前のいかにも、“ざます”とかいいそんな女教師の説教は、止まらない

「だいたい、アナタのその髪は、何です?!?!茶色だなんて!!!!
ッだらしない!!それに……」

雰囲気悪い女教師がそこまで言いかけた時

「あんま、コイツ虐めないで下さいよ、ね?センサー?」

「ッ……???!!!」

女教師は、眼鏡の下目を大きく見開き真っ青になる

涼子は、この時初めて【最低矛盾生徒会長】の凄さを知った

「……は……芳賀様がそこまで言うなら……広田さん……
早く教室に行きなさい……」

目を虚ろにさせ、俯く女教師は、目の前の【最低矛盾生徒会長】と目を合わせないようにしているのが分かった

「ほら、行くぞ」

そう言うと【最低矛盾生徒会長】は、涼子の腕を引っ張り職員室から出て行った

「ちょ……ちょっと!!!!痛いっ!離してよ……」

抵抗する涼子を見殺し【最低矛盾生徒会長】は、どんどん進んでいく

「アンタ何怒ってるのよ?! アタシが何かしたッ?!?!」

訳も分からずこんな乱暴に引きずられ涼子の怒りは再び沸き起こった

「あの・・・女教師・・・涼子の事馬鹿にしがった・・・!!」

突然壁を蹴りだす【最低矛盾生徒会長】その姿を啞然として見ているしかできない涼子

「え・・・と・・・アタシの為に怒ってくれてるの・・・」

そうたずねると【最低矛盾生徒会長】は、しまった!!とゆう顔をして涼子を見る

分かりやすい奴・・・

少し苦笑い交じりの涼子に必死に向かって弁解する【最低矛盾生徒会長】

「ち・・・っ!!ちげーよ!!俺は・・・俺はただ・・・」

目を泳がせ、明らかに焦っている【最低矛盾生徒会長】可哀想に思えてきた涼子は、それ以上虐めるのをやめた

「もう良いから・早く教室に案内してよ」

まだ、言い訳を考えている目の前の【最低矛盾分かりやすい生徒会長】を助けてあげる涼子

「お・・・っお・・・涼子がそこまで言うなら・・・案内してやる・・・」

ホッとした様子を見せる【最低矛盾生徒会長】を涼子は、何故か可愛いと思ってしまう

こんなアタシって、もしや病気・・・ッ?!!!!

と、心の中で叫ぶ涼子だった

(6)

「今日から転校することになった広田 涼子です……よろしく
お願いします……」

【最低矛盾分かりやすい生徒会長】のせいで大遅刻した涼子は、授業の途中に自己紹介をするハメになっていた

さらに、先程まで涼子のクラスの中まで着いて行く！と聞かない【最低矛盾分かりやすい生徒会長】を追い払うと更に大遅刻になってしまった涼子

「みんな、仲良くするように……じゃあ広田は、一番後ろの空
いてる席に座りなさい

それじゃあ、授業始めるぞー234Pの」

涼子が席に着く前に授業は、始まり涼子は、焦って席に着く

あれ……アタシの隣の人今日お休みなのかな……??

隣の誰も座っていない席を見て涼子は、少し残念そうな顔をする

そして、勉強熱心な涼子は、ノートとシャーペンを取り出しさっそく、黒板の文字を書き写す

その時……

ガラッ・・・！！

みんなの空気が一瞬にして凍りつく

全員の視線の先には・・・・・・・・

男子生徒が立っていた・・・

だらしない制服の着こなし方に、金色に輝く髪は、整髪飲料によって無造作にたてられていた

こりゃ、みんなの空気も凍りつくわけだ・・・

一人で納得する涼子は、ハッと空いている隣の席を見た

も・・・もしかして・・・・・・・・あの人の席・・・・・・・・

あの不良少年が隣となれば、話は別だ、今まで落ち着いていた涼子の顔は、みるみる青ざめていくのが分かった

シーンと静まり返る教室に不良少年の靴の音だけが奇妙に響き渡る

一歩一歩確実に一番後ろの涼子に向かってくる【不良少年】

何で此処の学校は、こんなキャラ濃い人ばったりなのよ？？！！！！！！

泣き叫びたいのを我慢し、冷静に冷やかな視線をもつ目の前にまで来た【不良少年】に向ける

「転校生？」

【不良少年】は、涼子に冷たい視線を送る

コクンと縦に小さく頷く涼子は【不良少年】の威圧感と迫力にあっけにとられていた

みんなの視線が自分の方に向いていると気づいた【不良少年】は、睨みを利かして教師を見る

すると、男教師は慌てて黒板に再び文字を書き始め、みんなは、何事も無かったようにそれぞれの作業を始める

アタシ、凄い人の隣になっちゃった……………

そう思う涼子だった……………

(7)

カラン・・・

「落ちた、取って。」

涼子は、溜息をつきながら下に落ちた赤いボールペンを拾う

先程から隣の席の【不良少年】は何度もペンを落とし拾わせる、とゆうガキくさい嫌がらせを涼子にしてくる

だんだんと腹が立つてくるのを涼子は、必死に押さえ笑顔でペンを渡す

いつまでもめげない涼子の姿を見て【不良少年】はついに禁句を言ってしまった

「胸ちっせーな」

ボソリと吐いた言葉を涼子は、聞き逃さなかった

「アンタ、人の事言えんの？」

「はあ？」

しまった！と涼子が思う頃には、もう遅い涼子の口は、ペラペラと魔法にかかったように勝手に動く

「だーから、アンタも人の事言える位立派なモノ持ってるのか？ってふにゃチ ミジンコ野郎」

普段下ネタなど、決して言わないはずの涼子だったが、スイッチが入るともう止まらない

「なーに？アンタ何もいえないわけ？やっぱり、アンタチン ついてないんだ」

さすがに呆気にとられていた【不良少年】だっって此処まで貶されちゃあ黙ってない

「言わせておけば……その前に、お前、俺が怖くねえの……」

【不良少年】が耳につけている幾つものピアスが奇妙に光りおそらく、喧嘩をしたのであろう、口から血がかさびたとなって痛そうに赤紫色に変色していた

「そりゃ……怖いに決まってるじゃない。」

当たり前だともいうようにキツパリト言い切る涼子

やはり、怖いものは怖いのだ【最低矛盾生徒会長】でさえ、怖いのにこの【不良少年】を目の前にしてビビらないわけがない

「ハッ、何だそれ散々俺の悪口言っておいてか」

悪ガキのように邪悪な笑みを口に含ませ

長く伸びた金色の前髪の下に覗かせる、以外にも綺麗で澄んでいる瞳

そんな【不良少年】が笑う姿をまた、皆が驚いたように目を見開き口をポカンと空けて眺めている

コイツが笑うってそんなに珍しいことなんだ……

そう直感した涼子は、少し嬉しい気分にもなった

涼子が【不良少年】のせいで書きそびれた黒板の文字をノートに写そうと思ったとき

キンコーン

カーンコーン……

教室内にチャイムが鳴り響き、みんなは【不良少年】から視線を外し、それぞれの休み時間を過ごす

あ……黒板の文字消されちゃった……

再びノートに書き写そうと黒板をみると目直らしき人が黒板の字を消してしまっていた

「良かったら、私のノート写す??」

涼子が困っていると数人の女子が涼子を取り囲んでノートを差し出す

「あつめっちゃ助かる!ありがとう」

ノートを受け取り涼子はニコリと微笑む

「涼子ちゃんってさ・・・神田君と知り合いなの・・・?」

神田・・・???

涼子は、誰か分からなかったが、大体予想はついた、

【不良少年】の事だね・・・???

チラッと隣を盗み見ると、今の短時間でもう夢の世界へと出発している【不良少年】の姿

涼子は、少し苦笑いしながら涼子を取り囲んでいる女子生徒たちに言う

「今日始めて会ったけど・・・」

すると、女子生徒たちは目を見開き顔を互いに見合わせる

「涼子ちゃん凄い！あんな怖い人とお話できるなんて……」

隣の【不良少年】に聞えないよう小さく吐く女子生徒たち

「そんなにコイツ怖いのか？」

「当たり前じゃないっ！人殺しって噂もあるし、いつも夜中に寮抜け出して薬やってるって……」

みんな、青ざめた顔をし、血相を変える

「まさかーだって、何でそんな事してきて、学校辞めさせられないのか？」

そりゃあ、この顔を見れば誰もが悪い奴と思うだろう、けど涼子はこんな綺麗で澄んでいる瞳の少年が悪い奴などと思えなかった

「それが、神田君のお父様あの神田グループの社長さんで、この学校に莫大な額を援助しているの

学校側としては、そんな莫大の額手放すわけにはいかないでしょ？だから神田君を辞めさせないのよ」

神田グループといえば、ホテルやデパート遊園地などと

色々な支店を持ち、日本で指折りの大きな会社だとゆうことは、涼

子でも知っていた

けど、一つの疑問が生まれた

「じゃあ、なんでコイツは、この学校にいるの？」

神田グループの息子なら、もっと良い高校があるじゃない」

「それがっ……」

うちの生徒会長と神田君って幼少の頃から、犬猿の中らしいのよ、それで、神田君がうちの生徒会長と張り合ったためにこの学校に来たって噂もあるわ」

生徒会長……その言葉を聞いてアイツの顔を思い出す

アイツが神田グループの息子と犬猿の仲………？

それでも、涼子には納得がいかなかった

張り合ったために、普通その学校に入学するだろうか………？

涼子の疑問は、増えるばかりだった

(8)

ピンポーン

ピンポーン

『全校生徒に連絡、今から全校集会開くから、全員体育館に来い』

ピンポーン

ピンポーン

「・・・・・・・・・・？」

んっ・・・・・・・・　今は、幻聴？？自分の耳を疑う涼子でも、今は、確かに【最低矛盾分かりやすい生徒会長】の声

「涼子ちゃん早く体育館行かないとっ！！！」

先程まで、涼子を取り囲んでいた女子生徒たちが口々に言う

「うちの生徒会長自己中だから怒らせたらとんでもない事になっちゃうー！」

教室にいた生徒達が慌てて体育館へと向かう

ただ一人を除いて・・・・

「ごめん！先行ってて！すぐ行くから」

そう言つて涼子は、窓の外を眺めている一人の男子生徒に近づく

「アンタは、全校集会だか、出ないの？」

その男子生徒は、金色の髪を掻き分け驚いたように涼子を見る

「何よ、その化け物を見るような顔は」

「別に・・・」

お前こそ、行かなくて良いのかよ・・・」

不貞腐れた子供のような顔をする【不良少年】

「あんな最低矛盾分かりやすい生徒会長の話なんて聞く気になれないし・・・」

「え・・・？」

お前翼と知り合いなの・・・？？」

【翼】と呼んでいる所から2人は犬猿の仲では、無いのでは・・・？？と直感する涼子

「知り合いって程でもないけど・・・」

それより・・・アンタとあの生徒会長ってどういう関係なの？？」

気になっていたことを思い切って聞いてみる

「どうつて・・・俺男より、女が好きだし、そういう趣味無いんだけど・・・」

「ちッ!!違ってッ・・・!!あの・・・アンタって・・・生徒会長と仲悪いの・・・??」

「ヒロ様。」

「え・・・??」

「だから、ヒロ様教えてくださいって言ったら教えてやるよ」

「はぁああ?!!!!」

目の前の【不良少年】からとんでもない言葉が飛び出してきて、吹き出しそうになる涼子

「あー言わないんなら、俺も言わないけど・・・??」

憎たらしい笑顔を不気味に浮かばせ、涼子の怒りに火を付ける

「ッ!!!分かったわよッ!言えば良いんでしょ?!言えばッ!」

プライドの高い涼子だが、こうなってはプライドなんかより意地の方が大分勝っていた

「ヒロ・・・さ・・・ま・教えて・・・下さい・・・ッ・・・／
／」

「良く出来ました。」

完全に馬鹿にした上から目線で、見涼子を下す

「従兄弟。」

「へっ??」

「だーから、俺と翼の関係だろ??ただのイトコ」

「じゃ・・・アンタたちが犬猿の仲っていう噂は・・・
??」

「本当に仲悪いんなら俺は、此処の学校に居ないだろ」

そうニツと笑う姿は何処と無くあの【最低矛盾分かりやすい生徒会長】に似ていて

少しだけ、またドキッとしてしまう涼子だった……

(9)

「お前行かなくていいのか？」

「え．．．？」

ピンポン

パンポン

「えー生徒会長から．．．今から、5分以内に体育館に集まらなかった者・1秒でも遅れてきた者は何らかの処分を下す。」

ピンポン

パンポン

廊下にも教室にも人が居ない学校は、【最低矛盾分かりやすい生徒会長】の声を余計不気味に引き立たせる

「翼、本当にこないだ遅刻した奴停学にさせたからな」

「．．．ツ??!!!!」

呆氣にとられて動けない涼子に向かって薄笑いを浮かべる【不良少

年】

やっぱコイツ【最悪矛盾分かりやすい生徒会長】と同じで性格悪ッ
!!!!!!!!!!

「じゃあねっ！」

少し頬を膨らませ怒った表情のまま教室を出て行こうとしたとき・
・・・・

「待てよ・・・。」

手をぎゅっと掴まれる

そして、目の前に【不良少年】の顔が・・・・・

「ゴミついてる。」

「へッ?!?!」

「だーから、ゴミついてる、キスするとも思ってたか？」

「……ッ／／／??!」

顔を真っ赤にさせ、恥ずかしさのあまり顔を背ける涼子

「そんな顔してると、本気ですぞ。」

「ば……っ馬鹿っ!!!」

ドアを乱暴に閉め、息を荒くしながら去っていく涼子を見て

「………本気モード入ったかも………」

そう吐いたのは涼子は知るよしもなかった………

(10)

もう何なのよっ?!?!!

従兄弟揃ってあの2人、危険人物にも程があるっ!!!!!!!!!!

腹を立てた涼子は、乱暴に体育館のドアを開ける

ガラッ・・・！！！！

「・・・・・・・・・・。」「

体育館中に涼子が勢いよく開けたドアの音が響き渡り
全校生徒が一齐に涼子のほうへと視線を送る

「遅刻者1名」

ステージ上でマイクを片手に薄気味悪い笑顔を涼子に向ける【最低
矛盾生徒会長】

「あ・・・・・・・・え・・・・・・・・と」

「さあ、遅刻者にどんな処分を下そうか」

まるで、楽しむかように考え込むステージ上の生徒会長

ア……アタシ……どうなっちゃうの……??!!!!

相変わらず全校生徒の視線は、涼子に向けられていて

その中には、先程涼子を取り囲んでいた女子生徒たちが心配そうに涼子を見つめている

「涼子ステージに上がって来い」

全校生徒が一瞬ざわつく

『え……今生徒会長“涼子”って呼んだよね?!』

涼子ちゃんと生徒会長ってどういう関係なの??!!』

興味津々そうに隣の女子生徒に尋ねている涼子と同じクラスメートの姿が目に入った

あの生徒会長どういっつもりよッ??!!!!

半場キレイ気味でステージ上へと上がる涼子の腕を無理矢理引っ張り抱きつく生徒会長

「いーか！

今日から1 - D組広田涼子を

本日付けで生徒会長専用のペットとする！！

そんじゃあ解散っ！！」

は・・・・・・？！

状況を把握できないまま涼子は【最低矛盾分かりやすい生徒会長】の腕の中でポカンと口を空けている
周りがざわつき始め教師達が沈めようと一生懸命注意している

「どうだ？驚いただろ？」

やっと今までの状況を把握した涼子は

【最低矛盾分かりやすい生徒会長】の頬を平手で叩いてしまっていた

(11)

パチンツ・・・！！

鋭い音が体育館中に響き渡り

ざわついていた生徒達は、一瞬にして静まり返った

「ってー！！！！何すんだよ？！！」

「そつちこそ何企んでるのよ最低矛盾分かりやすい生徒会長！！！！」

「だから、涼子は今日から生徒会長専用ペットだ！！！！
しかも何だよそのネーミングセンスのないあだ名は？！！
今から俺の事は翼って呼ばせてやる」

どこまでも俺様な【最低矛盾分かりやすい生徒会長】は腕を組んで
明らかに涼子を見下している

「お言葉ですが生徒会長、アタシあなたが
大っっ嫌いなんです。」

生徒達が驚いた顔をして一斉に涼子を見る

涼子は、この時退学覚悟で最低矛盾分かりやすい生徒会長に反論した

「好きだったら・・・」

「え・・・？」

「涼子が俺の事好きになったら、俺専用のペットになるんだな？俺涼子を惚れさす自信充分にあるから」

「はっ???!!!」

涼子は、目の前のナルシスト生徒会長の言っている意味が理解できず、ただ口をポカンと空ける

「って事で、涼子は今日から俺のモノだ・・・手出す奴は・・・分かってるよな？」

マイクを通し全校生徒や教師達が啞然とする中俺の物宣言する目の前の馬鹿生徒会長

女子の視線が痛く泣き崩れている女子生徒の姿もちらほらといった

やっぱモテるんだ・・・

ずば抜けて足が長く整った顔のましてや生徒会長は、女子生徒の身近なアイドル的存在だった

「なっ何言ってんのよ馬鹿っ！！！！」

「そっだよ、翼

転校生困らしたら駄目じゃん」

えっ・・・・・・・・・・

????

全校生徒は更にビックリする事になった

体育館の入り口には・・・・・・・・

無造作にたてられ、前髪はアシメになっている金髪頭に幾つものピ
アス

あの学校創立以来の問題児

神田 ヒロ

の姿があつたのだから・・・・・・・・
そして・・・

『ねえ！今神田 ヒロ、生徒会長の事“翼”って呼んでたよね
2人って噂じゃ犬猿の仲なんじゃないの・・・・？?!』

再びざわつき始める体育館の中

「ヒロ・・・お前なんで・・・っ」

「ごめーんね？」

俺も涼子チャンが気に入っちゃった

「

はあああああッ?????!!!

涼子は頭の中で叫んだ

(12)

「な・・・・・・・・ッヒロ・・・・・・・・本気かよ・・・・・・・・??」

【不良少年】は、ひょいとステージの上上がり
涼子と翼を無理矢理引き離す

「ああ本気だよ。」

シーンと静まり返った体育館で涼子を挟み2人は火花を散らしていた

「ヒロ・・・・・・・・俺今回だけは譲んねえから」

そつ吐き捨てる翼は、ステージから降り

「全校生徒解散。」

とだけ呟くように言って体育館から姿を消した

「アンタまでどういうつもり？」

右肩に乗っている不良少年の手をどかして涼子は、問う

「どーゆうつもりって……」
「こーゆうつもり」

「ふざけないでッ!!」

従兄弟揃ってアタシを馬鹿にしてるの?!」

息を荒くし怒り出す涼子

「俺は、本当の事を言っただけだよ?」

キョトンと首を傾げながらあくまで平然を装う【不良少年】

生徒達は、殆ど体育館から退場していて、よけい2人の声が響く

「勘違いしないでよ」

アタシあんたみたいに軽い奴じゃないんだからッ!!」

「知ってる」

だからそんなトコが気に入ったの

それに俺逆に感謝されるべきじゃない……??俺がこなければ
今頃お前翼のペットになってたんだぞ?」

凶星を突かれ少し焦る涼子

それに気づいた不良少年は涼子を気遣ってか

「別にそんなのどうでも良いけどよ」

と付け加えた

「とにかくっ！！！」

アタシは、アンタ達の思い通りにはならにからっ！！！」

「ハハハさすが、

威勢が良いね、俺に此処まで言った奴初めてだわ」

そこは、涼子自信もビクリしていた

いくら自分が気が強く勝気だからとはいえ、
前の自分なら外見だけ見ればこんな怖い人に逆らえなどしなかった
はずだ

しかし【不良少年】は涼子に心を許したのか、初めて会ったときよ
り刺がとれたように感じた

「話がそれだけなら、アタシ授業に戻るから」

「じゃあ俺も授業出よっかな」

「えー？！

アンタは、いいわよ不良は不良らしく授業サボってなさい」

「ひっでーなんだよソレ！！！！」

じゃあ嫌がらせに毎日授業に出てやるッ！！！！！！」

神田ヒロは、悪ガキのようにニィッと笑い涼子の頭をくしゃくしゃと撫でた

そして、付け加えるかのように

「あ、嫌がらせってのは嘘

俺は、お前の顔見たいから俺は、授業に出るの」

と言って涼子に背を向け行ってしまった

不意打ちだった……

女の子が言われてドキッとしてしまうようなコトを
あいつは、サラッと言い遂げた

「小悪魔不良め。」

そう吐いて涼子も不良少年の背を追い教室へと戻って行った

(13)

- - - - 翼目線 - - - -

「全校生徒解散」

俺は、そう吐くと体育館を後にした

「俺かなりカツコ悪ッ．．．．．」

何がキみたいに逃げてんだよ．．．．

でも．．．．

でも、涼子だけは、誰にも渡さねえ

たとえば、ヒロにだって．．．

*****10年前*****

「おとうさん、おかあさんっ！

ボク、こんかいテスト98点取ったんだよ！」

「まあ凄い！

有名私立校でもトップなんて凄いわさすが翼ね」

「・・・・・・・・何だこの点・・・・・・・・」

「おとうさん・・・・・・・・??」

「ヒロ君は、100点だったそうじゃないか
何をやっているんだこの馬鹿息子っ!!!!」

バシッ ツ!!!!

「?!?!」

「部屋に戻って勉強してこい。」

「おとあさん・・・・・・・・っ?」

「何度も言わせるなっ!部屋に戻って勉強して来いっ!!」

俺の父さんは、俺とヒロをすぐ比べたがった
俺がどんなに良い点を取ろうと周りの人に褒められようと
あの人だけは、俺を決して褒めるということをしなかった

「翼君あの有名な私立中学校に進学するんですって？将来はお父様の後を継ぐのかしら？」

「はい、父の学校を引き継ぐつもりです」

「偉いわねえ……」

あら、そういえば従兄弟のヒロ君は何処の中学校に？」

「……公立の中学校に行くと聞きました……」

父さんは、昔から俺にヒロを敵視するよう教育してきた
しかし、スポーツ、勉強全てにおいて俺は1つもヒロに勝った事無かった

ヒロの父親は、俺の父さんとは正反対で自由を愛する人で
そのせいか、ヒロは小学生高学年になると
日に日に不良へと変化していった

「ヒロ君頭やスポーツでいうと日本でもトップなのに……
やっぱあの態度よねえ……」

親族や知り合いの人たちは、態度の悪いヒロを極端に嫌がった

「この馬鹿息子！

神田の息子にまた負けたのかッ！」

俺の母とヒロの父は兄弟で性格もそっくりだった
優しくて俺を誰よりも分かってくれた

しかし、そんな母も父さんにはけして逆らうことが出来なかった

「しかも、ヒロ君わしの高校に入学してくるそうじゃないか
まったく何を考えているんだあの親子は」

歳を取るにつれ、俺の怒りと恨みはヒロへと向けられた

「お前は、もういいから部屋に戻って勉強しろ！」

「……はい、父さん。」

俺は、部屋に戻るフリをしてこっそり
このくだらない家から抜け出した

もうつんざりだ……

いつその事このまま死んでしまおうか……？
翼の心はそこまで追い詰められていた

空が青く雲ひとつ無い良い天気だった

檻の中にいる鳥のような俺

外に出れば俺は無力で、右も左も分からない町並み

昔から父さんに外に独りで出ることを禁止され、
友達なんてものは生きていて1度だつてできたことなど無かった

「あれ？キミもしかして翼？」

俺に声をかけてきたのは、金色の髪に幾つモノ不気味に光るピアス
どこからどう見てもチンピラにしか見えない男

「そうですけど、僕に何か？」

こんな知り合いなどいるはずない……

翼の整いすぎている容姿のせいでその容姿を憎む

【不良】などからよく、変な因縁などをつけられていた

「うわー小学校ぶりじゃん 俺ヒロだけど覚えてる?!」

生まれてきてからずっと憎んでいた男

俺の欲しいもの全てを手に入れていた男

「……ヒロ……?」

「そうそう! いやぁ翼カッコよくなつたなあ……
あの有名な私立の中学校に通ってんだろ?」

そんな一言でさえ俺には、嫌味に聞えて仕方なかった

ヒロは、俺なんかよりも完全に容姿端麗だ

今は、長い前髪にピアスの数々で不良にしか見えないが

ヒロは、普通にカッコいいのだ、先程から俺たちの前を通る人たちの視線は、確実にヒロだった

しかも、俺の通っている私立中だってヒロが入学試験を受ければ確実に合格だっただろう

全国模試でも確実に指5本の中に入るヒロだが、

【つまらない】という下らない理由で近くの公立高校に入学したのだ

「あ！そつだ俺お前んト」の親父さんの高校に入学する事になったんだよ

もうすぐで、俺たちも同じ学校だな！そんなときはよろしく」

「そうですか、それでは僕急いでいるんで。」

「おい！ちよつと待てよっ！」

「僕にまだ何か？」

「相変わらずお前ロボットだな・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・ ロボットでは駄目ですか？」

俺は、昔から父さんに忠実な“ロボット”として育てられてきた
悲しみや憎しみは全て俺の目の前にいるヒロに向けるようインプットされている

「つまんねー奴・・・」

よし！俺がお前を人間にしてやるよ」

「・・・・・・・・・・。」

俺は、無言のままヒロについていく事にした

こんな所を父さんにでも見られれば父さんはたたじゃおかないだろうけど、もうどうでも良かった、最後にこのヒロのいう“人間”とは
どういうものか知れたかったのだ

「あの・・・此処は何処なんですか？」

「ああここ？ここは、ゲーセン

翼みたいな純粹で綺麗な奴は、この程度の遊び場が丁度いいだろ」

翼は、“この程度”と言われたのが少し頭にきたので少し不貞腐れた顔をした

「おいおい、そんな怒んなよ〜ごめんって
お詫びにカワイイ子紹介するからちよつと来いよッ!!」

「??????」

初めて“ゲーセン”という場所に訪れた翼は新しい発見と驚きの連続だった

「ちよつと！ヒロあれは何です?!!」

「あああれは、UFOキャッチャーって言って100円入れたら1回遊べるの

って、翼どんだけ外の世界知らねんだよ?!本当お金持ちの坊ちやんだな」

「ヒロも坊ちゃんじゃなか・・・」

子供のようにはしゃぎまわる翼の腕をヒロは無理矢理引っ張ってある部屋へと連れ込む

「ヒロ・・・この部屋はなんですか？？」

「この部屋は、俺等常連しか入れねえVIP ROOMみたいなモンだよ」

「そんな部屋に僕が入っていいんですか？」

「ああ俺のツレだからな・・・」

それと、翼その敬語やめろよ、あとその表情一つ変えないロボットみたいな面も」

「・・・僕、本当に笑ったこと無いんです。」

「は?!」

父さんかが昔から教えてきたこと

笑顔は、媚びるためだけに使え余計な所で笑顔なんて振りまくな芳賀家の品が疑われる

そう教育され続けてきた翼は、もはや忠実なる人間の皮を被ったロボットでしかなかった

「……………変ですか…?」

「……………可哀想な奴だ……………」

「へ…………?」

「まあいい、入るぞ」

ガチャツ…………

扉を開けたその先には、数人の若い男女が酒を飲んだり歌ったりと
まるでお祭りのようににぎわいようだった

「ヒロじゃーん久しぶり!」

「おうみんな元気にしてたか?」

「ヒロが来ないから寂しかった」

てゆかつそのヒロの後ろの子超カッコイイんだけどお ヒロのお友
達い?」

茶色い髪にゆるくパーマがかけられている女はヒロの首に手を回す

「ああ俺の従兄弟

みんなこいつは、翼仲良くしてやれよ」

「よろしく・・・おねがいします・・・。」

「ちょっとおゝ翼くん固いよおもっとリラックスしてえっ」

「はぁ・・・。」

そう言われても同世代の男女とはあまり接触を持たない翼はどうしていいか分からなかった

「翼くんお酒飲むう??」

すでに酔っ払っているらしき人が顔を真っ赤にさせ翼に酒を勧める

「いや・・・まだ未成年ですし・・・。」

「イイじゃんゝそんなきたいこと言わないでゝ」

お酒飲むと悪い事全部忘れていい気分になるんだよー?」

悪い事を全部忘れられる・・・???

翼は、そんな酒の虜になった

「おおっ！翼くん良い飲みっぷりだねえ・・・」

「?!?!おいつ！翼に酒を飲ましたのかッ?!?!」

「ん・・・ああ、もうチューハイ3本目いくぜ？」

「ッ！何てことしてくれんだッ!!!」

翼は酒飲んだ事ねえんだよ！

初心者にそんな飲ます馬鹿が何処にいんだよッ!!!
ほら立て翼もう帰るぞッ　!!!」

「んんっ・・・頭がっ・・・ぐるぐる・・・」

ヒロは、こんな所に翼を連れてきてしまった事を後悔した

ヒロの周りには、未成年からの飲酒により

アルコール中毒やついには薬に手を出してしまう者もいたのだ

そんな恐ろしさをしているからこそヒロは1度だって喫煙飲酒をした事が無かった

しかし、自分の不注意のせいで大切なたった1人の従兄弟に飲酒をさせてしまった

激しい自己嫌悪と後悔が胸を押しつぶそうとした、しかしヒロは必死で耐え翼の目が覚めるのを待った

「んっ……ん」

「目え覚めたか？」

「ヒロ……此処は……俺は……？」

「すまん、俺が着いていながらもお前に飲酒させちまった」

申し訳なさそうに翼を除き見るヒロはなんだか情けなくも見えた

「いいんだ、僕が望んで飲んだ事だし……」

……忘れたかつたんだ、家のことも父さんのことも……

……」

「良いか翼嫌な事あろうが辛い事あろうが絶対飲酒だけはしちやいけねえ

確かに酒は嫌な事を忘れさせてくれるだがな、それと同時に自分の体を蝕んでいくんだ

だから約束しろ、飲酒だけはもうしないと……

そして……辛い事悲しい事があるなら全部俺に話すこと……約束できるな……？？」

縦に小さく頷く翼

「お前やつと人間らしい顔になってきたじゃねえか」

翼はふとガラス張りのショーケースに目をやる

そこには、ヒロの隣に嬉しそうな笑みを浮かべている少年がいた

これが俺・・・・・・・・??

生まれてきてから笑うことをゆるされなかった俺が

今この時間この場所で笑っている・・・・・・・・??

この時翼は、ヒロが言っていた“人間らしさ”を生まれて初めて知った

想像したよりも、もっとあったかいもので心がぽかぽかと安らいだ

「俺たちは、何があっても友達だ」

そっぴい残して翼の前から立ち去るヒロ

友達・・・・・・・・

初めて出来たトモダチ

俺は、もしかしたら飢えていたのかもしれない愛情と友情に
だが、いつでヒロがそばにいてくれた

辛いとき悲しいとき

少しずつ人間らしさを取り戻し表情も豊かになりつつあった時

彼女に出会った・・・・・・・・

初めて覚える感情が胸にこみ上げてきた

初恋だった・・・・・・・・

「だから絶対これだけは譲れねんだ・・・・・・・・」

そう吐いて翼はゆっくりと涼子がいる教室へと向かった

(15)

「で、どういう関係なのッ???!!!!」

「え・・・??」

教室に戻ってくるなり、涼子は、再び教室内にいた女子生徒たちに囲まれていた

「どういう関係って・・・??」

「だからッ!!!」

神田ヒロと生徒会長との関係よっ!!!

ねね、どっちが本命なの???!!!!やっぱ神田ヒロ??!!」

「いや・・・え　と・・・別に・・・」

曖昧な笑顔で何て言えばいいのかを必死に考える涼子

「もー涼子ちゃん転校そうそうやるわねッ!!!」

あ、涼子って呼んで良い??私は、カナって呼んで」

そう言っつて涼子の前に手を差し伸べるショートカットの可愛い女の子

「うんよろしくね、カナ」

涼子がそう言うのと周りの女子たちも次々に自己紹介をし始めた

全員の顔と名前を覚えるのは大変だったが、涼子は友達ができてホッと安心した

・・・キーンコーン
カーンコーン

「あ！お昼だお弁当食べよ涼子」

そつ言うのと涼子たちは、席を移動してわいわいお弁当を食べ始めた

「あーエビフライなのに醤油が入ってないー！！！」

「誰か、卵焼きとなんか交換しないー??」

にぎやかな昼食だった、みんな楽しそうで涼子も凄く楽しかった
しかし、涼子は1つ気になる事があった・・・
先程から神田ヒロの姿が見えないのだ・・・
誰も座っていない隣の席を見つめると突然みんなの話題の中心が涼子に移った

「良いよね、涼子はモテて……」

そう言い出したのは身長が高くモデルのような体系の舞だった

「ほんと」

生徒会長と金持ちボンボンの神田ヒロに言い寄られてるんだもん」

怪しげな笑みで涼子を見るカナ

「ちがッ！……本当に違うんだって」

「おー??そうやって否定する所がますます怪しいぞ??」

カナがそう言った時だった……

「涼子、もう俺達の関係バラしちゃえよ。」

「?!?!?!」

急に涼子の視界に入ってきたのは、翼だった

「せつ生徒会長なんでここに……??//」

そう問うカナの頬が微かに赤かった

いや・・・カナだけでは無いクラス的女子全員の視線の先が翼に向けられ、頬がほんのり色付いていた

「ペットを連れ戻すのは、主人の役目でね」

そう言つと腕をぎゅっと掴み強引に涼子は、教室から連れ出された

「だから、あたしはアンタのペットなんかじゃ・・・」

「黙れ。」

冷酷で何もかも見透かすような瞳

「・・・・・・・・。」

さすがの涼子でも言い返せない

「何、ヒ口に気に入られてんだよ」

「アタシだって・・・知ら・・・」

「俺が良いと言つまで口を開くな。」

敵を威嚇するような冷たい表情

あの、生徒会専用フロアで迷子になった時涼子に初めて向けられた表情と同じ表情だった……

「俺に忠実を誓え」

「え……??」

「何度も言わせるな、俺に絶対服従しろと言ってるんだ。」

足が竦む、まるで金縛りにあったように体が言う事を聞かなかった

「……………」

「退学……だな……」

「???!」

それだけは、避けたかった……

最初に翼に会った時は、本当に退学になってもいいと思っていたが

せつかくクラスに友達が出来たのだ、友達と離れ離れになるのは、もう沢山だった

「嫌だろう?」

涼子は悔しさを必死に押さえコクンと小さく頷いた

「それじゃ、俺に忠実を誓うか?」

再び縦に頷く涼子

「契約成立。」

不気味に薄笑いを浮かべる翼

鳥肌が立つ……………

この先2人にどんなことが起こるのかは、まだ誰も知る由も無かった……………

(16)

「此処が生徒会専用フロアだ、
まあ涼子は今朝来たから知っているだろうけど」

赤いカーペットに幾つもの銅像今朝見たばかりのあの景色

たった一つ違うのは

アタシがこのフロアに出入りするのが許されたってこと

アタシは、退学を免れる為にコイツの“ペット”になることを約束
した

これからどんなことをやらされるんだろう・・・

「生徒会に加わったからには、涼子には俺達と同じ寮に住んでもら
う。」

は？

言葉の意味がまったく理解できない涼子

アタシがこれから

この生徒会長と

「同じ寮ッ?!」

「当たり前だろ、生徒会に加わったんだから
荷物は、既に普通寮から生徒会寮へと移されている」

翼は何事もないような平然とした顔をする

「お・・・同じ寮っ・・・??」

未だに翼が言った事を理解できない涼子は放心状態になっていた

「安心しろ、誰もペットに手を出そうなんて思わない。」

「ッ!!何なのよアンタ本当にいちいち腹立つわねッ!!」

「翼サマ。」

「はッ??!!」

涼子は、何処かで同じような光景があつた事を思い出す

「これから翼サマと呼びやがれ。」

教室でヒロに言われた言葉が頭の中で再生される

【だから、ヒロ様教えてくださいって言ったら教えてやるよ】

これは、遺伝子なのか………？

従兄弟同士ソックリなんてDNAって凄いんだなあ………

そんな下らない事をかんがえているとまたあの生徒会長が憎たらしい口を開く

「返事が遅い

ペットのくせに生意気だぞ。」

こんのヤロ〜ッ！！！！！！！

そう言いたいのを退学にされては、困るので我慢する

「すつ………すいませんつ………つば………さ………サマ」

耐え切れない屈辱と恥ずかしさが涼子を襲った

「よくできました。」

それなのに、翼はわざとかどうかは不明だがこの一言で余計涼子の屈辱を2倍にさせた

「あと生徒会メンバーを紹介しないと、よし涼子生徒会室へ行くぞ、迷子になるなよ……？」

「……………」

涼子は、無言で翼の後ろについていった

また、この学校は何でこんな馬鹿に広いんだろう……？

先ほどから20分は歩いているというのにまだ生徒会フロア内だ

「着いたぞ。」

ガチャ……

涼子が見た先には、今まで見てきた部屋とは比べものにならないほど大きな部屋

「おーい、亮、翔太、望いるかぁー？」

翼がそう呼ぶと次々に現れる生徒会メンバーたち

「この子が翼が体育館で全校生徒集めて俺のものの宣言した涼子ちゃん?!?!」

「うーわ、女の子だーかーわいい」

「僕の方が可愛いもんっ」

また、キャラの濃そうな人たちに涼子は早くも疲れを感じた

「今日から俺のペットになる涼子だ、悪戯したらブツ殺すから。じゃあ俺、会議に行ってくるから、あと適当に自己紹介とかしうて。」

そう言い残すと分厚い書類を引き出しから取り出し翼は部屋から出て行ってしまった

「愛だねえ・・・あれは、そうとう涼子ちゃんにハマってるよ。」

「はっ?!?!」

じぶんの耳を疑った

アイツがアタシにハマってる?!?!?!

「無い無い、考えただけでも鳥肌立つし。」

「あーれ？普通の女の子だったら泣いて喜ぶのに。」

「いいから、早めに自己紹介しようぜッ！！！」

あつ、俺の名前は福山^{ふくやま}翔太^{しょうた}会計やってまーすっ！」

勝手に自己紹介を始める落ち着きの無い頭がツンツンした、見た感じスポーツ少年

「じゃあ次僕かなあつ？」

僕のお名前はあ山下 望君ですっ、んーとねえ書記やってるよお」

後ろ髪を二つに縛り大きなリボンをつけているのが印象の可愛らしい少年

「書記次長の久原 亮です、よろしく涼子ちゃん」

世間一般でいう“たらし”という言葉がピッタリの外見チャライ男

「え……とアタシは……広田 涼子で……す……よろしく……」

涼子は少しぎこちない自己紹介をして

目の前の3人の視線から逃れようと少し後ずさりした

「で、どうやって翼を手懐けたの?!」

「え……?」

「何か、特別な方法でも使ったんでしょ?」

あの女嫌いの翼が生徒会に女の子を入れるなんて……弱味でもにぎったの?!」

「女嫌い……?」

「あれ?知らなかったの?」

翼って、女の子と離すことも触ることも超苦手なんだよねえ」

え……???

(17)

女嫌い・・・・・・・・・・？？

「でっ、でも！！アイツあたしの腕引っ張ったりアタシとも普通に話してたし・・・・・・・・・・」

納得がいかなかった、あれ程自分に突っかかってきた翼が女嫌い？？それなら今までの事は、何だったのか？もしかし自分は女と見なされていないのか？様々な疑問が次々と浮かぶ

「ハハハハッ！

涼子ちゃんそれはね、翼が涼子ちゃんの事がす・・・・・・・・！！！！」

亮がそこまで言いかけた時・・・・・・・・

「りょーうー君っ　それ以上余計な事喋ったらア翼にお仕置きされちゃうぞぉ？」

「・・・・・・・・まあ、翼にこの事バレたら後々厄介な事になるな・・・・・・・・」

え・・・・・・・・・・？！そこまで言いかけて教えてくれないのツ？！！
やっぱアタシ女として見られてないんだ・・・・・・・・・・がつくり下
を俯く涼子

「そろそろみんな自分のお仕事しないとオ・・・・・・・・・・」

あんま涼子チャンに構つてると翼に怒られちゃうしい
ほら、亮も翔太も早くしなよオ……………っ」

「オっ……………オウ……………」

望に叱られしぶしぶと自分の書斎へ戻る亮と翔太

「涼子チャンはア、翼の書斎で待つてなよ……………
多分もうスグで翼会議終わると思うしい？」

「え……………？でも、会議終わるって……………さつき会議行つた
ばかりじゃ……………」

あんな厚いファイルを持って行つてゐるのだから、すぐ終わる会議と
いうわけでは無いだろう……………
そんな素朴な疑問を目の前で目をぱちくりさせている望に尋ねる

「……………ハハっ、涼子チャンわざとだと思つてたけどオ、本
気で鈍感なんだア……………
あのねー？いつでも好きな人のそばに居たいって思うでしょオ普通
？会議をサボつてでもね」

望はそう言つと悪戯鬼のような笑顔を浮かべ涼子ただ1人を残し部
屋を出て行つた

「え……………？？？どういう意味……………？」

今だに望の言っていた言葉の意味が分からない涼子は頭に幾つものクエッションマークを浮かべていた

バンツ・・・・・・・・！！！！

望の予言通り翼は、望が去ってから10分もしないうちに涼子がいる書斎へと戻ってきた

「あ・・・・・・・・れ？あいつら何処行った・・・・・・・・？」

「みんななら仕事に戻ったわよ？」

「あいつらに・・・・・・・・何もされなかったか・・・・・・・・？」

微かに息遣いが荒い、多分あの長い距離を走ってきたのだろう

「なにもされてないけど・・・・・・・・？？」

「ハア・・・・・・・・！なんだ・・・・・・・・良かった・・・・・・・・てか・・・・・・・・
・俺走ってきた意味ねえじゃん・・・・・・・・」

独り言のようにぶつぶつと吐いてソファに腰を掛ける翼

「やっぱ走ってきたんだ……」

「……ッ?! え……と違え……よ?! 別に涼子が心配でとかじゃ……ねえし
俺はただ……その……えーと……」

バツが悪そうに目をキョロキョロさせ分かりやすい程焦っている翼を見て涼子は

「ありがと、心配してくれて」

と吐いた

「だから涼子の為じゃねえよッ!!!!!! / / /」

冷たいと思えば優しくなったり急に怒りだしたり分かりやすくなったり

涼子はいつしかそんな生徒会長をまるで我が子を見ているような優しい眼差しで見っていた

「嘘でしょ　　ッ?!?!」

生徒会専用寮に響きわたる涼子の声

「なんで、アンタの部屋の隣がアタシの隣なのッ?!?!?!」

「だから、生徒会メンバーへ同じ寮だって言っただじゃねえか!」

「だからって、なんでアンタの隣の部屋なのッ?!?!?!」

「此処しか空いてねえんだよッ!!!!!!」

火花を散しながらお互いを睨みあう涼子と翼

「もはや痴話喧嘩ア? 凄い声響いてるよオ」

「翼も落ち着いてホラっ……………」

「涼子ちゃんどうしたの? 翼に何か言い寄られたの?」

涼子と翼の大声によってそろそろと集まってくる生徒会メンバーたち

「こんな変態生徒会長の隣でなんか寝れません!!!!」

「お前みてえな貧乳に何かしようって気も起きねえよ、馬鹿」

「……ッ?!?!?!」

翼と涼子の喧嘩はますますヒートアップしていく一方だった

「涼子ちゃん……気持ちに分かるけどさ……元々俺が住んでいた所をわざわざ追い払ってまで涼子ちゃんの隣になりたかった翼の気持ちも分かってあげ……」

そこまで言いかけると翔太は殺気を感じた

殺気の元は、もちろん翼で黒縁眼鏡が反射してよく目が見えないが翼の周りには、なにやらオーラが出ている

一瞬にして、空気が凍りつく……

翔太の事を助けようもないと言わんばかりに、呆れてみている望

「アタシの隣になりたかった……?」

「ッてゆうのは、俺の軽い冗談で……ハハハハ……」

苦しい言い訳をしようとする翔太

そんな翔太を睨み付けている望

気まずい空気が沈黙の中に流れる

「なーんだ！冗談かぁビックリしたよもうっ！」

「えッ?!?!?!」

皆が苦しい言い訳と思っていたがただ一人涼子は、翔太のバレバレな嘘に本気で騙されていた

「……………涼子ちゃん、将来変な詐欺に引っかかないようにね……………」

「へっ……………」

望は、あまりに天然で馬鹿正直過ぎる涼子に哀れに満ちた視線を送る

「そーんなことよりもッ!!アタシは、コイツの隣だけは、絶対嫌だからね!?!」

再び先ほどの話題を持ち出す

訳も分からない転校初日に、俺のペットになれ!と脅されたあげく、いきなり今日から俺の隣の部屋だ!なんて

男を全く知らない涼子にとって大分ハードルが高すぎたのであった

「それじゃア……………もしイ翼が涼子ちゃんの部屋に無断で入ってきたり、

襲おうとでもしたらア涼子ちゃんは、翼のペットを辞めれるってゆう約束を結べば良いんじゃない?」

「へっ?」

「そしたら、涼子ちゃん退学にならずに翼のペットを辞められるよ

オ？

翼は、勿論この約束守れるよねえ？？」

につこりと微笑む望の顔は、翼に選択肢を与えようとはしない半ば強制された笑顔だった

小さく翼が首を縦に振る

「お……おう……。」

縦に頷く事を強制した望の笑顔は、通常の女の子らしい無邪気な笑顔へ変わった

「だって、涼子ちゃん良かったじゃん、これで安心だよ」

可愛らしい笑顔が今度は涼子に向けられた、しかし、可愛い顔とは裏腹に望の裏の顔の恐ろしさを知った涼子だった

- - - - - 翼目線 - - - - -

隣に．．．．隣に．．．．涼子がいる．．．．／／／

俺は、そう考えただけでも顔が熱く火照る
俺だって男だ、好きな女が隣で寝ているのを黙って見守ってるなんて事はできるはずが無い

元々翔太の部屋だったこの部屋を俺は土下座までして翔太と交換してもらった

勿論下心はある、しかし望の余計な約束のせいとその計画は実行せずに終わった

「涼子にペットを辞められたら困るしな．．．．」

そう言つて涼子がいる隣の部屋の壁を見る

その時だった

コンコンッ．．．

乾いたノック音が静かな部屋に響く

もしかして、涼子か．．．．　　??

そんな甘い妄想をしながら翼は、髪を少し整えなるべくクールにド

アを開ける

「こんばんわー」

そこにいたのは、涼子なんかでは、無く金髪の少年ヒロだった

「ヒロ……お前何しに来た……此処は生徒会メンバー以外立ち入り禁止だぞ。」

友達だって、今となつてはライバルだ……威嚇するような鋭い目つきで睨み見る翼

「ほら、そんな怖い顔しないで」

涼子がこの寮に居るって聞いたから遊びに来ただけ」

呼び捨てに“涼子”などと呼んでいることが気に入くない翼は、更に目をギラつかせる

「アイツには、もう関わるな。」

ドスの利いた低い声で脅すように吐き捨てる

こんな外見だけは、真面目なイケメン君でもキレル時はキレルし喧嘩だって、子供の頃から空手や剣道に柔道、雑魚の一人や二人を片付けるぐらい朝飯前のことだった

「おー？翼今回は、本気モード入っちゃってるー？あらー残念だけど

涼子は、俺が貰うから」

「ッ?!!!!」

始めて見るヒロの本気の顔に翼は固まってしまった

言っている言葉や声のトーンはいつもと変わらないが、

威圧感と肉食獣のような突き刺さるような鋭い目に普通の人間なら、
誰しもが怯むだろう……

ガチャッ……

タイミング悪く涼子の部屋のドアが開く

「あれ?不良少年じゃん!何で此処にいるのー?」

2人の間に陰悪な空気が流れているのも気づかずに、ヒロに近づく
涼子

「部屋隣だったんだ……」

ヒロは、ボソッと吐くと悪巧みしている少年のような不気味な笑顔を浮かべた

「ハハハ、良い事思い付いちゃった」じゃあ俺用事思い出したからもう帰るねー?お二人さんばいばい!」

ヒロがあんな簡単に引き下がるはずが無い、翼の中に嫌な予感が渦を巻いていた……………」

「ちよつと……………？何ボーつとしてるのよ！」

突然話しかけられ一瞬体をビクツとさせまた平然を装う

「ああ……………そうだもうそろそろ、飯の時間だ、食堂でみんな待っているはずだから先涼子行つてろ

あと、風呂だが寮に女子風呂が無いからしばらくは、部屋のシャワーを適当に使つてくれ

急遽女子風呂を作らせる、そして間違つても男風呂だけは、入んなよ？」

子供のような扱いに少しムツとしたがお腹の空いている涼子は、何より早く食堂へと急ぎたかった

なにしろ、昼食中に翼に連れてこられたので昼食をまともに取って無かつたのだ

寮内のパンフレットを見ながら涼子は必死び食堂を探す

この寮に暮らすのは、たったの5人だけだというのに、この馬鹿デカイ寮は3階まである

パンフレットを見ると寮内にも喫茶店、コンビニに拳句の果てにプールまでついていた

この時あの不良少年の親の事を思い出す、世界の神田財閥の息子が通っている学校だ、援助金も凄い額なのだろうと関心する

お腹を空かせた涼子がやつと食堂にたどり着けたのは、あれから20分後のことだった……………

夕食の席には生徒会メンバー全員が揃っていて後から来たはずの翼までいた

「涼子やっぱ迷子になってたんだろ……………」

「うつ……………」

図星を付かれ何も言い返せない涼子をまるで宝物のように優しい目で見ている翼

生徒会メンバー全員は翼の気持ちに気づいていたが、この時の翼の目を見て本気なんだとみんなは、確信した

「はいはいーこんな広い寮迷わない人の方が珍しいしね？
ほら、涼子ちゃん席座って！涼子ちゃんの席は翼の隣ね」

此処でも翼の企みがあつて、涼子は翼の隣に座るハメになったのは、言うまでもない……………

(19) (後書き)

いつも、読んで頂きありがとうございます！感想・評価の方も書いて頂けるととても励みになります。

(20)

「ごちそうさまア」

みんな食欲旺盛なお年頃なので、あんなにも大量にあった料理も20分程度でペロリとたいらげた

「あー今日も食ったなー！さ、部屋行つて風呂入つてこよー」

みんなそれぞれの部屋へ、帰ろうと席を立った時……………

コンコンッ……………

5人しか使用しない食堂にしては広すぎる室内に響くノック音

「誰だ、入れ。」

翼がそう言つと、ドアの向こうから堅苦しいスーツを着た整った顔の中年の男性が出てきた

「翼様、亮様、望様、翔太様、そして涼子様、御伝えたい事がございます。」

「何だ、黒木か

あ、涼子この人は、ここの寮の世話をしてる黒木だ、聞きたい事があれば黒木に聞け
で、どうしたんだ？黒木が直々に来るなんて何かあったのか？」

「……………ヒロ様が……………」

ヒロ様が生徒会に加わると連絡が入りました……………」

「ッ?!?!?!」

翼は目を大きく見開き、啞然とする

翼の嫌な予感は的中し、あのヒロの不気味な笑いが頭に浮かぶ
だが、翼には一つ納得いかないことがあった

「……………ッ!父さんはッ?!?!親父は認めたのかよッ?!?!」

異常な程に、プライドが高く神田の血を果てしなく恨んでいる親父
がそんな事するはずがない

「芳賀会長からは、すでに許可を得ています。

それで……………問題が一つありまして、ヒロ様が翼様と相部屋が言
いと仰っております。」

「ハアッ?!?!?!絶対嫌だからなッ?!?!?!」

「そう仰いまして……………只今空き部屋がございませんので……………」

しばらくは、翼様には、我慢していただかないと……………」

「……………ッ!?!?!とにかくッ!俺は、絶対嫌だからな!」

そう言うと翼は、乱暴にドアを閉めて食堂を後にした

「ハア……まったく……翼は相変わらず意地っ張りなんだから。」

「嗚呼、芳賀会長に何て御伝えしたら……」

戸惑いながら冷静さを少し失った黒木を見ると翼の父はそうとう怖い事を予想させた

黒木は、落ち着き無くし、ブツブツと独り言を吐きながら食堂を出て行ってしまった

「あ、涼子ちゃん気にしないで？いつもあんな感じだから」

亮は涼子の不安そうな顔を消し去るかのように小さくウインクした

「よし、望お部屋に戻るおっとオ

あ、その前に……りょうちゃんちよつと来て……」

熊の人形を抱いた可愛らしい男の子は涼子の腕を引っ張り食堂の外へと連れ出した

「え……？望君？」

望のしたい事が理解できない涼子は掴んでいる腕を離そうと止まろうとする

「いいからアいいからア」

望は、楽しそうに鼻歌なんか歌いながら涼子の腕をもつときつく握る
まるで女の子のように白くて細い望の手だがそれとは真逆にあまり
に強い力は
やっぱ男の子なんだなと涼子を納得させた…………。

「此処は確か…………。」

涼子が連れてこられたのは、涼子が翼のペットとして始めてつれて
かれた場所だった

「そおオここは、生徒会室だよお」

薄暗い部屋の中で月の光だけが望の顔を不気味に照らす

ガチャツ…………

シーンとなった無言の部屋に金属が音をたてる、それはまぎれもなく
鍵を掛けた音だった

「のぞむ…………クン………… ツ？」

「ハハハッ！本当馬鹿だよねえ！涼子ちゃんさあ…………目障りな
んだよね

君に翼の周りをうつつかれると翼の品が落ちちゃうの
涼子ちゃんには、悪いけど…………みんなやつちゃってよ」

嘘でしょ・・・・・・・・？

奥の部屋から数人の男たちが出てくるのが音だけでも分かる

それは、映画やドラマの中で繰り広げられていた自分には無関係だ
と想像していたあのシーン

・・・・・・・・レイプ・・・・・・・・

頭の中でパツと浮かぶその言葉

恐怖感が涼子の足を竦ませ声さえも奪ってゆく

「翼のペット辞めるって言うんなら、未遂にしてあげる事も可能だ
けど・・・・・・・・？？」

望の口から出された1つの提案、これを呑まなければ確実にこの男
たちに犯されてしまうだろう

しかし、涼子はその条件を呑むことが出来なかった、何故だか分か
らないが体中が涼子を止めたのだ

アタシ、今翼のペットでいたいって思っている・・・・・・・・？？

その事に気が付いた涼子は自分自身でもビククリした
そして、涼子はこの大勢の男の中で大声を張り上げた

「アンタたちそれでも男なのッ？！！大勢でなきゃ何も出来ない

ただの弱虫じゃないのッ！！
あんた達みたいなのがいるから若者は全員駄目みたいに思われるんじゃないのッ！！！！！！」

今日は本当に自分でもビックリする事の連続だった
しかし、今更後悔しても遅い、涼子は胸を張って堂々と仁王立ちをした

「ナメてんじゃねえぞこのアマツ！！！！」

一人の男が涼子に殴りかかろうとした時

「待てッ！」

涼子は、目をゆっくりと見開く・・・助けてくれたのはなんとあの望だった

「何だよ？！！！！この女になら何しても良いって言ったのは望だッ？！！！！」

「・・・・・・・・僕の話が聞けないの？」

瞬き一つしない見開いた瞳は、ヒロに負けない・・・・
いやそれを上回るほどの威圧感を放った

「涼子ちゃんって面白い子だね

そんな涼子ちゃんをコイツ等にやらしちゃうのは、勿体無いよなあ・・・・・・・・

ねえ、お前等やっぱ邪魔だから出て行ってよ。」

「・・・・・・・・」

無言で出て行く数人の男達、月明かりだけが奇妙なほど明るく部屋を照らしていた

(21)

「さアて、どオやって涼子チャンを虐めてあげようかなア？」

先ほどまで強気だった涼子もさすがに後ずさりする程の迫力

こんな広い校舎の中で叫んでも誰も来てはくれないだろう

しかも、鍵が掛かっている上に、先程の男たちがドアを見張っているはずだ、

100%とっていいくらいに此処から逃げる方法は、無かった

「涼子チャンさア、処女でしょオ？」

翼も誰かにやられちゃった女なんて捨てるに決まってるよね」

捨てられる……………??

涼子の頭の中は、真っ白になっていた、もし翼に捨てられたら？
そう考えた途端涼子の目から大量の涙が零れ落ちた

「いやっ……………や……………翼あつ……………やだよお……………
ッ」

子供のように泣きじゃくる涼子を前にしても望の表情は変わらない

「大丈夫、僕これでも技とテクには自信あるからア
痛いなんて最初だけだよオ？すぐ快感の虜になっちゃっよオ」

・・・・・・・・助ケテ・・・・・・・・

下腹部に激しい痛みが襲う

「あア・・・残念、まだ濡れてない。」

望の指が涼子の中へとゆっくり出入りしている

指を出そうと涼子はもがくが、もがけばもがくほど指は奥へと進入していく

「痛いっ痛いよおっ・・・・・・・・！やめて・・・・・・・・望君ッ・・・・・・・・！」

指が1本また1本と濡れていない涼子の中に無理矢理進入してくる

「強情だなア・・・・・・・・あれ？もしかして涼子ちゃん不感症オ？」

屈辱と恥ずかしみが激しく涼子を襲う、もう力尽きた涼子はだらんと腕を下げ荒い息音をたてる

「早くしないと翼探しに来ちゃうじゃんかア・・・・・・・・
もー良いやア感じてない女にイれるのはア好きじゃないけど・・・・・・・・
」

望は、左手で涼子の口を押さえ右手でズボンのジッパーに手を掛ける

嫌だ・・・・・・・・嫌だ・・・・・・・・嫌だ・・・・・・・・

必死に望から逃れようと暴れるが力が強くて振り解けない

モウ駄目ダ・・・・・・・・

絶望と悲しみに身を任せ涼子は抵抗する力を弱めた時だった

『ダッ・・・ダッダッ・・・！！！！！！』

部屋の外から微かに誰かの走っている靴の音が聞える

翼がアタシを探しに来てくれた！！！！

確信は持てなかったが涼子は、一筋の光を見つけたような気分だった

「チッ・・・！」

望は、素早く乱れた服を直して部屋の電気をつけた

「良イ？涼子ちゃん、これは僕達2人だけの秘密だからね？

涼子ちゃんだってこれがバレれば翼に捨てられちゃうだろオし僕だって困るだから内緒ね？」

「・・・。。。」

不気味な笑顔が目には焼いて離れない・・・
まだ立つと少し腰が痛み、近くにあった机に体重を掛ける

パンツ・・・！！！！！！

息を荒くし、血相を変えて部屋に入ってきた翼
その向こうには、数人の男達が倒れていた

「望・・・お前涼子に何してた・・・？」

口からは、血が流れ高そうなスーツは、もうボロボロだった

「涼子ちゃんとは、ただ仕事の内容を確認してただけ。

僕仕事の話のときは集中したい派なんだ、ドアの前にいた男たちが翼に何んかしちゃったでしょ？ごめんねえ。ねえ？涼子ちゃん・・・？」

「・・・・・・・・うつ・・・・・・・・うん」

翼と目をあわすことが出来ない、もし目が合ってしまったら確実に涼子は涙が溢れてしまっていた

「・・・・・・・・そうか、それじゃあ望は部屋に戻ってろ、涼子は此処に残れ。」

「え・・・・・・・・？」

「悪いな望、出来の悪いペットを調教するのも主人の仕事だね」

翼がそう言つと望は、しばしばと部屋を後にした

「さあ、涼子本当の事だけを答えろ。望に何をされた？」

「・・・・・・・・べ・・・・・・・・別に・・・」

肩を掴まれ、嫌でも翼と目が合ってしまう。

【翼も誰かにやられちゃった女なんて捨てるに決まってるよね】

リアルに蘇る望の言葉、絶対言っちゃ駄目だ。涼子は堅く口を閉じる

「お仕置きだな。」

「ッ………?!」

「嘘付くの下手くそすぎ。主人に嘘付いたらどうなるか1から教えてやるよ。」

恐怖感が涼子の体を走りぬく………翼と望の顔が重なる

「いや………やめて………お願い………痛くないで………っ」

「………やっぱり、望にやられたのか?」

捨てられる………

涼子は静かに涙を流した

沈黙が続く静かな部屋の中に翼の視線だけが痛く刺さる

(2 2)

「っ……や……ごめんな……さい……だから……あたしをすてない……でっ」

大量の涙は次から次へと流れていき、その涙によって視界がぼやけ翼が今どんな表情なのかも分からない

「ペットを生涯世話するのが主人の仕事だろ？俺は、涼子を手放す気など全く無い。」

そう言つて涼子の体をまるで壊れ物を扱うように優しく優しく抱き寄せる

心地よい体温が涼子の体をすっぽりと包み今度はもう一生離すまいと涼子の体をきつくきつく抱きしめる

「ごめん……涼子を守れなくて……」

耳元で囁く愛しい人の甘い声。もう涼子はこの時点で翼への想いにハッキリと気づいた

アタシは、翼が好き……

こんなにも愛しい人の側に居られるのなら、たとえ“ペットと主人”という関係だとしても良かった

一定のリズムでドクンドクンと脈打つ翼の心臓の音。そんな微かな

音でさえ愛おしくて、愛おしくて。

翼の大きな胸の中で泣きつかれた涼子は心地よい体温に包まれ静かに寝息を立てた。

- - - - - 翼目線 - - - - -

たった今俺の胸の中で小さく寝息を立てている愛くるしい女
想像してたよりも、もっと小さくて細い。それは、少し強く抱くと
壊れてしまいそうな程だった

少し茶色みをおびた髪を優しく優しく撫でる。すると涼子は小さく
呻き声をあげた

生殺し状態だった、理性と本能を押し殺して涼子を起こさぬよう静
かに彼女を持ち上げる

すると翼は下半身の変化に気づいた。

血と汗によってボロボロになったスーツのズボンの中で大きくなっ
ていた自分のモノ

「ペットに欲情しちまうとはな。」

涼子の部屋に向かいながら、翼は、情けない声で小さく吐き捨てる。

ガチャツ・・・

広い寮内をお姫様抱っこをした状態で歩き回るのはいくら軽い涼子だといえ、さすがに疲れた

まだ、ダンボールに囲まれた部屋の隅にあるベッドに涼子を降ろす

「か弱い仔つさぎチャン、飢えた狼にはご用心を。」

そう言い残すと翼は涼子の部屋を後にした・・・・・・・・

向かったのは、2階にある望の部屋

先程の優しい顔とは一変して翼の顔は怒りに満ち溢れていた

コンコンツ・・・・・・・・

「はあい。だアレ？こんなじかにイ」

いつもと変わらない望の声。翼はあくまで平然を装った

「よお望。」

「・・・・・・・・ツ？！！！！ど・・・・・・・・どオしたの翼？こんな時間にイ・・・・・・・・」

一瞬は曇った顔をしたが、演技の上手い望は何も無かったかのように惚けてみせる

「俺に慕うべき者が俺のペットを虐めちゃ駄目だろ？」

いつもの翼と違うことに気づくと望は、危険を感じドアを閉めようとドアノブに手を掛けた時

「ッ・・・?!?!」

翼の手が望の手をグツと掴む。爪が食い込み望の腕からは一筋の血が流れた

「今日からお前を解雇する。寮も普通寮へと移す。」

感情を持たない以前の翼の表情だった、

怒りも悲しみも喜びも何も無い、ただ無表情のまま望を見る

生々しい血が床へと赤い跡を残している

望は、1つまた1つと床が赤く染まっていくのを恐怖感を浮かべて見ていた

(23)

「・・・っ・・・う・・・ん・・・」

淡いオレンジ色のカーテンから眩しい朝日が漏れている

ズキンッ・・・

腰が痛む。その拍子に昨日の出来事が蘇る
アタシは望君に襲われかけた・・・

認めたくない事実と昨日翼に抱きしめられた時の心地よい体温
涼子は、ベッドから体を下ろし床にペタンと座り込んだ。

「・・・翼が・・・此処までアタシを運んで来てくれたのかな・・・
・・・？」

恥ずかしいような、それでもって嬉しいような奇妙な感情に陥る

ア・・・アタシ・・・重かったかな？！！寝言とか言って無かつ
たかなッ？！！

ヨ・・・ヨダレなんか垂らしてたら、アタシッ・・・／／／／

昨日望に酷い事をされたのにも関わらずまだ、翼の事を考えている
自分。

それ程翼のことを深く愛してしまったのだと涼子は驚く

コンコンッ・・・

涼子は心臓が飛び出るかと思うぐらいビックリした。もしかして翼ッ?!!!!

などと言う淡い期待を胸にしまい、ゆっくりと扉を開ける。

「おはよーッ涼子」

そこに立っていたのは、髪を黒く染めたヒロだった

不気味に光るあの幾つものピアスもはずされていて、不良少年の面影は消えていた

「じゃーん似合う? 親父が生徒会に入るんだから髪ぐらいきちんとして言うもんだからさー」

その表情は何処と無く翼に似ていて、昨日の心地よい体温が思い出される。

そして、伸びきった髪をきちんと整えたヒロはビックリする程カッコよくなっていた

元々顔のパーツは良く、目なんかは翼の目にソックリだった

「すっごい似合ってる、絶対そっちの方が良いってきつとそのほうが女の子にもモテるよー!」

「どーでも良い女にモテたって意味ねえし……俺がモテたいのはただ一人……涼子だけ。」

そんなクサイ台詞を真面目な顔で言うもんだから、冗談とは分かっているが一瞬戸惑ってしまう涼子

涼子はヒロから目を逸らそうとするが、金縛りにあつたように自分の体が思うように動かない

一瞬でも油断すると吸い込まれそうなヒロの澄んでいる綺麗な瞳

「あ．．．え．．と．．」

あまりの気まずさに話題を変えようと涼子が口を開いた時

「大変だああああああアアアッ！！！！！！」

地響きかと思うぐらい足音をたてこつちへと向かって来る翔太の姿

「ど．．．どうしたのッ．．．？？」

「のむ．．．が．．．望がッ．．．！！！！！！」

．．．．．ヒロ目線．．．．．

「どーでも良い女にモテたって意味ねえし．．．俺がモテたいのはただ一人．．．涼子だけ。」

俺は、生まれて初めてこんなクサイ台詞を言った

言い寄ってくる女は飽きる程居る、女に1度だって不自由したことはない俺が

1人の女の為にここまで言うとは自分でもビックリしていた

目の前で戸惑う愛しい彼女
そんな彼女の困った顔もまた可愛くて見惚れてしまう

「あ……え……と……」

彼女が口を開いた瞬間……

「大変だああああああアアアッ!!!!!!!!!!」

せつかくの2人きりの時間を邪魔するかのように騒々しい奇声と足音

つたく……なんだよこの良いムードの最中に……

奇声を発していたのは、生徒会メンバーのなんとか、翔太って奴。
腹の立ったヒロは少し眉間にシワを寄せ近寄ってくる“あいつ”に
あからさま嫌な視線を送る

「のむ……が……望がッ……!!!!!!生徒会か
ら解雇された……!」

- - - - - 涼子目線 - - - - -

え………?

望君が・・・・・・解雇・・・・・・??

涼子の頭に嫌な予感が掠める

「翼はッ?!?!翼は何処に居るのッ?!?!?!」

「・・・・・・・・それが、今日の朝から見てないんだ・・・・・・・・授業も始まるってゆうのに・・・・・・・・」

嫌な予感が1つまた1つと積み重なっていく

早く翼を見つけ出さなければ・・・・・・・・

「おっおい涼子?!?!何処行くんだよ?!授業出ない気かよッ?!?!」

ヒロが心配そうに叫ぶ

「翼を捜しに行くッ!!!!」

そう言って涼子は、心配そうに見つめるヒロと翔太の前から走り去っていった

「此処にも居ない……ッ」

あれから何十分いや、何時間探しただろうか？

無駄に広い校内と寮を涼子が一人で探すのは難しすぎた

昨日転校してきたばかりの涼子は、何処に何があるかも分からない状態でひたすら翼を捜し続けた

職員室、生徒会長専用ルーム、会議室。

涼子が思い当たる所は全て行ったつもりだったが何処にも翼の姿は無かった

「一体何処に居るのよッ……?!あと行ってない場所は……」

必死に玄関にある案内所とにらめっこをする

………保健室。

一つの場所が頭に浮かぶ

何故かは分からないけど、そこに絶対翼は居るとゆう確信を持った
必死に広い校舎を走る、途中で教師の怒鳴り声を浴びせられながらも止まらずひたすら走り続けた

「ハアハア……ッ……」

涼子は深呼吸をしながらゆっくりとドアを開けた

「……り……涼子……ッ……?」

そこに確かに翼は居た……

昨日と同じように窓際の椅子に腰かけ本を読んでいる

「の……望君を解雇したの……翼なんですよ……
・?」

翼はゆっくりと立ち上がり涼子の前まで来ると強く抱きしめた

「ッ……つば……さ……?」

昨日の心地よい体温が再び涼子を包み込む

優しく涼子の髪を撫でると翼は小さく口を開く

「守ってやれなくてごめん。」

昨日も聞いたこの言葉

翼も翼なりに責任を感じているのが伝わった

「う．．．ん．．．大丈夫．．．それより望君の事だけど．．．
・アタシ全然平気だから．．．
あたし最後までやられてないし．．．それに翼が助けてくれ．．
．．．」

「え？」

涼子の言葉を途切れさせた翼のマヌケな声

「今何て．．．．？」

「え．．．．？だから翼が助けてくれたって．．．．」

「違うその前。」

訳も分からずキョトンと翼を見るそしてさっき自分が言った言葉を出す。

「え．．．．と．．．望君には、最後までやられてない．．．．
ってところ？」

「え？」

再びリピートされるあのマヌケな声

「望にやられてないの？」

目を大きく見開き口をポカンと空ける翼は本当にマヌケに見えた

「そう．．．．．だけど．．．．．?」

「はッ?!?!じゃあ何処までされた訳?!」

突然半ばキレ気味で言われたので少しムカつときた涼子はきつめの口調で答える

「あたしに翼の周りをうるつかれると翼の品が落ちちゃうとか何とか言われて

それから．．．．．え．．．．．と．．．．．」

やっぱり昨日あった事を口に出すのは無理だった、更に好きな人の目の前で望に指を入れたなんて絶対言えない

「なんだあ．．．．．ハハ．．．．．良かった．．．．．未遂だったか．．．．．」

「は?!何も良くないわよっ!あたし昨日すっごい怖かったんだから．．．．．!」

翼の態度に腹を立てた涼子は半べになりながらキレる

「ごめんごめん。

まあ確かに良く考えれば、望は絶対お前を襲えないんだよな」

「え．．．．．?」

「だってアイツ同性愛者だし。」

「ッ???!?!」

衝撃的な言葉が翼の口から平然と飛び出す

どっ・・・・・・・・同性愛者・・・・・・・・?!!!!!!

「望の事俺前フっちゃったから、多分涼子に嫉妬したんだろうな
・・・・・・・・・・・・・・・・ツて!こんな事してる場合じゃねえ!早く
望の解雇解かねえと!」

涼子の呆気にとられている顔を見ずに翼は保健室から立ち去ってしま
った

じゃあ昨日のは、望君がアタシに嫉妬してやっただけの話で
最後までやるつもりは無かったって事・・・・・・・・だよね?

ホッとした気持ちと望の本当の姿を知ってしまった涼子は複雑な顔
をしてペタンと床に座り込んだ

「ご……っ……ごめんなさい……っ……。」

大きな瞳に涙をいっぱい溜めながら涼子に謝る望

あの後、解雇は取り消しにされたものの、翼にキツイお仕置きをされた望は体を小刻みに震わせていた

「もう良いからっ……望君涙拭いてっ……？」

「あ……ありがと……うっ……りょうちゃんっ……」

「

昨日の望の姿を忘れるぐらい望の泣き顔は可愛くて、抱きしめたくなる。

「もう良いから望は、早く授業に戻れ。」

奥のドアから湧き出てくるように翼が顔を現し、望を部屋から追いつ出してしまった。

「アタシもそろそろ授業行かないとねっ！」

そう言つて涼子が立ち上がろうとした時………

「待て。」

翼に、思いつきり腕を引つ張られ体が傾く

「いった！何よ？アタシになんか用？！」

保健室での恨みをまだ根に持つてる涼子は少し強めの口調でキレてみる

翼は掴んだ手を自分の方へと力ずくで引っ張り再び涼子を抱きしめる

「ちよっ……／／なんなのよっ！昨日から……離しなさいよ変態っ！！／／」

自分の感情とはウラハラに翼を突き飛ばそうとする涼子

「ちよつと暴れるな……もう少し……よし……
・付いた……」

金属が当たるような冷たい感触が首筋に感じる

ふと見ると涼子の首には、キラキラと輝く綺麗なネックレスが付けられていた

「首輪の代わりだ。無くしたらお仕置きだからな。」

きっぱりと言い捨て翼は涼子を置いて部屋を出て行ってしまった

赤らめた顔を隠すために……

翼が出て行ったのを確認すると涼子は再びネックレスに視線を落す。

「・・・・・・本当綺麗なネックレス・・・・・・これ、相当高かったんじゃない?!」

これ程の綺麗なネックレスだ、しかも真ん中には、薄いピンクのダイヤにプラチナのチェーンそれ相当の値段だろう

改めて翼の凄さを知った涼子だった・・・・・・

キンコーン

カーンコーン

幸福感に浸っている暇も無く授業開始のチャイムが鳴る。今は、丁度3限目の家庭科の授業だろう

真面目な涼子は校内パンフレットを片手に、急いで家庭科室へと向かった

ガラッ・・・・!

「すみません!遅れましたッ!!」

息を切らし涼子は家庭科室に勢い良く入っていく

「あ!涼子だ!やっと来た」家庭科は先生用事で居ないから自習だ

よ、涼子ツイてるねー！」

可愛い笑顔でにつこりと涼子に微笑みかけてくれるカナ

そして、そろそろ次から次へと集まってくる女子生徒たち

「涼子って、生徒会専用寮に住んでるんでしょ？！やっぱり豪華なのっ？！！」

皆興奮したように目をキラキラさせて涼子に詰め寄ってくる

「べ……別に……案外普通の寮だよ……？」

苦笑い交じりで涼子は、みんなに寮内の説明やお世話役の黒木の話などをした

涼子が何か言うともみんな大げさに声を上げたり涼子を羨ましがった

「なんか生徒会長涼子に会ってから変わったよね。」

カナがそう言うのと周りのみんなも次々に頷く

「アタシなんて前、廊下ですれ違っただけですっごい睨まれたし！」

「アタシなんか、生徒会長に廊下走っていて怒鳴られたんだから！」

次々に女子生徒たちの口から出る前の翼の話

「でも、涼子が来てから刺が取れたって感じ さっきアタシ生徒会長に“おはよう”って挨拶されちゃったもん」

嬉しそうに顔を赤らめるカナ。そんなカナを見ていると涼子は胸が痛くなった

「あゝあ、あんなカッコいい彼氏がいるなんて涼子幸せ者だゝ」

みんな意味有りげにニヤニヤと涼子を見うる

「・・・・・・・・／／／ち・・・・・・・・ちがつそんなんじゃ・・・・・・・・!!!!」

そんなんじゃないから!と涼子が否定しようとした時

「あんなカッコいい彼氏って、まさか俺の事ー?」

「???!!!!」

みんなは一瞬にして凍りつく。なんたってそこには髪を黒く染めたヒロが立って居たから。

「ねーみんなあ、俺髪黒く染めたんだけどオー似合ってるー?」

更にヒロは、涼子と出会う前では、決して有り得ない笑顔を女子生徒に向けてみせる

「・・・・・・・・／／／／／に・・・・・・・・にあってるよ・・・・・・・・／／／・・・・・・ね?り・・・・・・・・りようこっ・・・・・・・・」

顔を茹蛸のように赤らめた女子生徒たちは、そのキラースマイルから逃れるためとっさに涼子に話を振る

「え．．．あ．．．うん、似合ってるんじゃない？アタシ的にはそっちの方が良いと思うよ？」

「良いと思うって事は、こっちの髪の方が好きって事だね．．．．
．？」

「．．．???う．．．うん、好きって事だけど．．．．？」

涼子は、全く意味が分からずただ適当に答える

「俺も涼子が好きだよ。」

突然の告白にビックリして涼子は、椅子から飛び落ちそうになる
涼子だけでは無く回りにいた女子生徒たちもマヌケな顔で口をポカ
ンと空けていた

「涼子言ったる？“好き”って、俺も涼子が好きだから。俺たち相
思相愛だな」

あまりに強引なヒロの説明にもう呆氣に取られるしか出来ない涼子
たちだった

「って事でクラスの男子みなさん。俺の彼女の涼子に手出したら、ソイツの体引き裂いて俺ん家で飼ってるピラニアのエサにしてやるから」

ヒロが言うときして冗談には聞えないところが怖い。

クラスの男子は青ざめた顔をして涼子と視線を合わせないようにしている。

「ちょっと！不良少年！何勝手な事言ってるのよっ！アタシあなたの彼女になったつもりなんて・・・」

「照れてるの涼子？そんなところも、かわいいー」

もう何を言っても無駄だと分かった涼子は呆れた顔をして弁解するのを諦める

「あと、彼氏に“不良少年”は無いでしょー！！もう俺不良卒業したし

・・・って事で、俺の事はダーリンかヒロって呼んで」

“呆れた”を通り越し涼子はハッキリ言って“引いていた”

「じゃあ・・・ヒロで・・・」

シカトするのも何か可哀想なので明らかに引いた目で答えてあげる

初めて会った時とは、間逆にハイテンションなヒロを見て
やっぱ、翼とは従兄弟でも似ていないと以前思っていた事を訂正し
た時だった……………

ピンポーン

ピンポーン

「涼子、主人の元に10秒以内で返って来い。さもないとお仕置き
だからな。」

ピンポーン

ピンポーン

授業中だと言うのにも関わらず相変わらず無茶な命令を出してくる
“御主人様”

“お仕置き”に何されるか分からないので涼子は、とにかく急いで
教室を出て行こうとする

「ちょっと涼子何処行くんだよっ!」

ヒロに手を掴まれドアに手を掛けようとしていた涼子の体が止まる

「ご主人様の元。」

べっと舌を出し、手を振り解いて急いで生徒会長室へと向かう

命令なんて本当は嫌なはずなのに心の何処かでわくわくしている自

分が恥ずかしくなる

あの赤いカーペットの生徒会フロアに入り、
生徒会室の扉が見えたとき涼子の心臓脈拍数は通常の2倍はあった
だろう

ガチャツ……

扉を開けると窓側にある生徒会長専用のソファ―に腰を掛け顔をしか
めている翼の姿

「3分48秒。」

その手にはストップウォッチがあり、時間を見るなり不機嫌そうな
顔をする

「ペットが主人を待たせるとはいい度胸だ、どうせヒロとイチャツ
イていんだろう?」

そう言つて不貞腐れた子供のようにソファに顔をうずめる

「え……翼……?」

あきらかにそれは、ヒロに嫉妬しているようにしか聞えない
涼子は少し顔を赤らめながら翼の方へ近づく

「お仕置きだな。」

ソファに埋めていた顔を上げると、翼は力まかせに涼子をソファに座らせる

「ッ?!?!?!」

今日3度目のあの心地よい体温が涼子に覆い被さってくる

ソファに押し倒された涼子は当然翼の力に勝てる訳も無く目を瞑るしかない

首筋に生暖かい翼の唇が重なりゆっくり吸い取られていく

たまに涼子は体をビクンと震わせ、また強く目を瞑る

角度を変え何度も何度も涼子の首筋に赤い跡を残していく翼

その時涼子は自分の体の変化に気付き始めていた

胸の奥を掻き乱され、奪われる事を心の何処かで望んでいるようなそんな経験は生まれ初めてなので少し戸惑う

「涼子っ……………」

翼のあの低い声がいつもと違う甘い声となって涼子の耳元で囁く

囁いたと思えば耳を甘噛みされたり、ピチャピチャと

聞いているだけで恥ずかしくなるような官能的な音が部屋中に響く

「……………ッアッあ……………」

不意に漏れてしまう涼子の甘い声

そんな声を出した事を恥じるように涼子は顔を真っ赤にし、翼から逃れようとする

けれど、また翼の力に押さえられ体を固くする事しかできない

「涼子の感じた声もつと聞かせてよ……」

再び耳元で囁かれる翼の甘い声に酔いしれてしまいそうになりながら涼子は必死に平常心を保とうと耳をふさぐとする

「…………お仕置き終了。」

そう言つとさつきまで覆い被さっていたあの心地よい体温が急に消えてしまう

翼はソファから体を起こすと乱れた服を直し、部屋を出て行ってしまった

「え……………?」

ソファにただ一人残され、啞然としている涼子

体の中にまだ熱が疼いていて、翼が残したもどかしさにおかしくな

り
そ
う
だ
っ
た

(27)

ガチャツ・・・・・・・・

翼は涼子1人を残して生徒会室から出るとその場に蹲った

「ッ・・・・・・・・俺本当カッコ悪ッ・・・・・・・・」。

制服のズボンの下がまたしても大きく膨らんでいた

醜いものを見るような目で翼は下半身を見る

経験はそれなりにあったし、女の扱いにも馴れている方だと思っていた

けれど、涼子に至っては今までの経験やテクは一切通じない、
それどころか逆に自分が2度も欲情してしまったなんて・・・・

自分に腹が立ち壁に八つ当たりをする

「壁をそんな乱暴に扱うなよ、生徒会長サン」

授業中だというのにも関わらず亮が何処からともなく歩いてくる

「その顔はりょうちゃん関係でしょ？」

いきなり凶星を突かれ返す言葉も見つからずただ黙りこくる翼

「翼って好きな子虐めて嫌われちゃうタイプでしょ？あんまり意地悪してたらりょうちゃんに嫌われちゃうよ？」

「……俺は、何もかも見透かすお前が嫌いだ。」

翼は不貞腐れた顔してフイと顔を背ける

フツと小さく笑うと亮は優しい表情をして、下に蹲っている翼の顔を覗き込む

「俺の元カノで良いんなら、何人か紹介するけど？」

涼子ちゃんの側にいるんだもん相当アツチの方もたまってるでしょ？」

「ばッ！／＼ふざけるなっ！お前と一緒にすんな！……溜まってなんかッ！！」

亮には全部がバレているようで焦って弁解するが実際の所もつかない限界だったりもする

涼子の顔を見るだけで“繋がりたい”と思ってしまう

「冗談だよ、じゃあ！俺女の子ホテルで待たせてるから、寮でね」

「ッ？！！／＼／」

手をヒラヒラと振る亮は翼に聞えぬよう小さく

「やっぱ翼をいじるの面白い」

と笑いを堪えながら呟いた

「まったく、あのプレイボーイは、何考えてんだか・・・／＼」

見た感じ遊び人の亮はその通り遊び人で特定の彼女など絶対作らない
翼はいじけた子供のような表情で亮を見送る

そして、後数分後に始まってしまふ会議を思い出し、会議室室へと
急ぎ足で向かった。

「副生徒会長、まだ翼様の姿が見えていません。」

「・・・あの翼が遅刻なんて珍しいじゃん、まあ良いや他の
役員の人適当に座っててね

まだ、翼も来ないようだし、俺向こうの部屋でお茶入れてくるわ」

「そんなッ！雑用係にやらせますよそんな仕事ヒ・・・」

指を一本立て、いかにも優等生君の補佐係の口に当てる

「俺がやるから良いの、あとこれからもう俺の事“様”付けしなく

て良いから」

にこやかに微笑み奥の部屋にある3畳程の小さなキッチンに立ちお湯を沸かし始める

ガチャツ・・・・！！

そこへ慌しい足音に走り過ぎて息切れしている翼が入ってくる

「遅れてすいませんッ！」

いつでも時間にウルサイ翼が遅刻をして会議室に来たので役員誰しもが驚いた

そんな中、会議の進行を早く進めたいのか、補佐係の優等生君は平然とした顔で単調にファイルを開き始める

「翼様、今日の会議の内容は、副生徒会長の就任式のご説明で・・・・」

いつものように、今日の会議の内容を聞くが疑問に思う事が一つ・・・・

「副生徒会長の就任・・・・？俺そんな話聞いてないんだけど・・・・」

首を傾げ、そんな話聞いたつげと自分の記憶を辿っていく

「黒木から、連絡入ってませんでしたか？少々お待ち下さい、今呼

んで参りますので。」

そう言うと、誰なのかも教えてくれないまま、奥の部屋に入ってしまふ

「黒木何か言つてたっけ・・・・・・・・？」

黒木は仕事となれば絶対完璧にこなし、皆の信頼も厚くゆいつ翼が信用している人だった

そんな黒木がこんな大切な話を忘れる訳がない

薄れている記憶の中から懸命に事情を整理する

すると、心当たりが一つ・・・・・・・・・・

【・・・・・・・・・・ヒロ様が・・・・・・・・・・】

ヒロ様が生徒会に加わると連絡が入りました・・・・・・・・・・】

昨日の夕食時に、いきなり黒木に報告を受けた時は半分冗談かと思つていた翼だが

今となつては、嫌な予感が頭の中を掠める

ゆつくりと開くドアの向こう側には、不気味な笑顔でお茶を持ってくるヒロの姿

「生徒会長サン、お茶は如何ですか？」

髪を黒に染め、ピアスを外しても、直残っているあの敵を威嚇するような視線

透き通っている目は、何もかもを見透かした様にすましている。

そんな空気の中翼は、呆然と立ち尽くす事しかできなかつた

「え……っと、副会長にされた、神田ヒロ様です。」

「……翼様？顔色が悪いですけど、どうかなさいましたか？？」

心配そうに尋ねてくる優等生君の言葉も頭に入らず、ただただ立ち尽くす

涼子とヒロが同じクラスというだけで、もう気が気では無いのにヒロが同じ寮になるなど翼には耐えられない事だった

「アハハハッ！翼凄い怖い顔してるよー！

なに？もしかして涼子取られるんじゃないかって心配してたりする??？」

何処までも余裕なヒロは、みんなに笑顔でお茶なんて配っている

「……黙ってるって事は、凶星かな？前にも言ったけど、俺が涼子を貰うから。」

会議室の中に気まずい雰囲気の流れ、先程までお喋りを楽しんでいた役員の人全員までもが黙りこくる

みんなの視線を無視するように、翼に対して威嚇を続けるヒロ

翼だって負けてはいない、黒縁眼鏡の下でまるで獲物を狙う肉食獣のような目でヒロを睨み付ける

見えない火花を散している翼とヒロを見て、優等生君は必死に会議

を進めようと頑張っている

「えっと……就任式は、明日の……っ。」

その勇気と頑張りには偉いとみんなが感心するが、可哀想な事に、誰も聞こうとはしない

そんな明日の就任式の会議より翼とヒロの涼子を争う戦いの方がみんな興味深かったからだ

「お前に、涼子は渡さない。例えどんな卑怯な手を使っても……
……。」

初めて守ってやりたいと思った女だ、そう簡単に手放す訳にはいかない。

けれど、ヒロも翼と同じ気持ちだった。翼に負けない位涼子を思っていた

2人のタイプの違う美少年が1人の女の為に友情まで捨てて、争う絵になる。とこの場にいた誰しもが思っていた

）
）
）

場の空気を読まない着信音が静まり返った部屋の中に大音量で流れる

「すっ……っ！すいませんッ……っ！……！！！！！！」

急いで立ち上がり部屋を出て行ってしまった1人の役員

「まったく、マナーモードくらいには、しとけよな。」

ヒロが少し怒った顔でドアを睨み付けると視線を翼に変え、ニコリと微笑みかけた

「あの……明日の件ですがあ………」

まだ、会議の進行を一人で進めようと頑張っている優等生君

「10分も時間のロスだ、この後も会議があるから会議を進めてくれ。」

翼の一言で一斉に皆資料やファイルをまとめ視線を優等生君に向ける

進行役の優等生君はやっと進められる！と嬉しそうな表情で明日の就任式の進行などを説明しだす

「えっ……と明日の就任式は、理事長・校長共に不在の為

校長・理事長の挨拶は無しで、就任された副会長様の挨拶続いて生徒会長様の挨拶となります

挨拶の内容は、こちらの方で用意させて頂きましたので、あとで生徒会室に送っておきます

明日の進行役は僕が勤めさせていただきます、質問・意見はありますか？」

やはり、補佐役に選ばれたとだけあって仕事はスムーズだ

そんな事を考えながら隣で座っているヒロをチラリと盗み見る

あの何かを企んでいるような、不気味な笑顔がヒロにはあった

翼は、嫌な予感が頭び掠めるのを無視して

「・・・・・・以上解散。」

とだけ吐いて会議室から出て行った

・・・・・・・・・・ヒロ目線・・・・・・・・

「あゝあ翼行っちゃった、本当翼って分かりやすいな」

腕を頭に回しあくびをしながらつまらなさそうに目の前の資料を見る

「ねえ、優等生君この明日の“副会長”からの挨拶って、俺が少し変えても良いんだよね？」

奇妙な笑顔を浮かべ、楽しそうに資料をめくっていく

「少なならアレンジも構いませんよ？」

あと・・・・・・・・僕の名前は、本田です。ヒロ様は、何度言ったら分かるんですか・・・・・・・・？」

相当“優等生君”と呼ばれるのが気に入らないのだろう本田は、不機嫌そうな顔をして素っ気無く答える

「ごめんごめん」

そう言いながら、ヒロは、手元にあった資料にボールペンで何かを書き加え、満足そうに眺め見る

「何を付け加えたんですか？」

あまりにもヒロが嬉しそうなので、本田は少し気になり資料を覗こうとする

「まだ駄目だよ。これ明日のお楽しみなんだから」

資料を慌てて隠すとキラースマイルと呼ばれるあの笑顔で本田にウインクした

- - - - - 涼子目線 - - - - -

体の中の熱が疼いて、そのもどかしさにおかしくなりそうになりながら涼子は必死で寮へと戻る

通常なら4限目の数学を受けに教室へ向かうのだが、今はそんな教室へ行ける状況では無かった

足がうまく前に出ず何度も転びそうになりながら涼子はやっと部屋へと戻った

「・・・・・・また授業サボっちゃった・・・・。」

今頃になって不安感が襲ってきたが、もう精神的に疲れていたのだから考えるを止めた

ベッドに寝転び翼の事を考えると、再びあの何とも言えぬもどかしさが体中を突き抜ける

アタシおかしくなっちゃったのかも……………

今までに無い感情とおかしくなりそうな感覚に涼子は不安感を覚えた

涼子は、そんな不安感を洗い流そうとバスルームへ向かう

下着を脱ぎ、洗濯機に入れようとした時、涼子は今までに無いくらい驚いた

大きなシミが下着にくつきりと跡を残していたのだ

恥ずかしさと自己嫌悪を洗い流すように下着を洗濯機の中に放り込むと涼子はゴシゴシと荒く体を洗った。

- - - - - 翼目線 - - - - -

「涼子、部屋にいるのか……………」

忘れ物を取りに行こうと寮に戻ると隣の部屋からシャワーの音が聞えてくる

翼は、駄目だと思いながらもそつと耳を壁に当てた

微かに聞える水の音が、とてつもなく官能的に聞え、翼の胸の鼓動

を早めさせる

涼子に触れた時のあの感触、肌触り、甘い声が鮮明に甦り、いつかヒ口と見たAVの女と涼子を重ね想像してしまう

「俺、何やってんだよ……………」

欲望を抑え切れなかった自分に腹が立ち近くにあったクッションに八つ当たりをすると物音をたてぬようそつと部屋を出た

「あー！いた翼何処行つてたんだよ？もう会議始まるよ！」

いつでもハイテンションで明るい翔太が翼を呼び止める

「悪い、忘れ物を取りに行つてた……………で、それは、何だ？」

スポーツ少年の翔太は会議室にまでバスケットボールやバットなど色々な物を持ち込む

「最近買った新しいラケット！俺何かスポーツ用品持ってないと落ち着かないんだよね」

ニイっと笑うと日焼けした肌のせいか歯が余計に白く見える

そんな無所気な性格が、みんなに好かれ、憎めない所でもあった

「翼あー早くう！俺早く会議終わらせてテニスしに行きたいんだからあー！」

授業もお構いなしに翔太は朝から晩まで他のクラスに混じって体育の授業だ

その他の授業はテスト前以外全然受けていないはずなのに、以外にも翔太は学年トップだったりもする

ガチャッ！

会議室には、もう約半数の人数が集まっていて、皆それぞれ話を楽しんだり、資料を眺めていたり和やかな空気の中で心地よい時間を過ごしていた

「会計長と生徒会長只今参上だよ　んッ　」

まるでヒーローごっこをしている子供のような決めポーズを取り、またあの無邪気な笑顔でみんなに挨拶する翔太

会議の中の大半は老年層で、他の学校の校長や市長だったりもする

「コホン……皆さん宜しいですか？これから我が校“神門坂私立高校”今年度の予算を決定したいと思います。」

校長の一言で徐に始まる会議は、先程の和やかな空気とは一変し、張り詰めた空気が流れる。

「では、我が校の会計長。福山翔太がみなさまに我が高校の現状をご説明致します。お手元の資料2ページをご覧ください。」

先程とは、声のトーンも話し方もまるで同一人物とは思えない程変わる翔太。

その様子を翼は満遍の笑みで見ていた。こういったメリハリの利く男だからこそ、翼は翔太を生徒会に入れたのだ

「我が校は、経済的には危機という訳ではありません。しかし、だからと言って無駄遣いなどで多額の援助金を無駄にするという愚かな間違えは犯してはなりません。

そこで、この学校に必要な物を生徒にアンケートを取った結果、生徒達が交流を持てる大きなホールや、運動不足にならぬようトレーニングジムなどの意見も出てきました。」

「しかしッ！それは生徒達の意見であり、教育に必要なものかどうか……。」

翔太のやり方に賛成しない隣の学校の校長が反論をする。

するといつものように、表情一つ変えず単調に答える翔太

「この学校を心地よく快適な学校にする為には、1番生徒の意見を取り入れるべきなのではないでしょうか？」

僕は、生徒会やら校長やら偉い人達が勝手に教育に必要無いなどと言って縛られた校則に使徒達が捕らわれてほしく無いんです。」

いつ聞いても完璧で筋の通っている翔太の意見に誰もが関心し、反論した隣の学校の校長は少し悔しそうな顔をした

「それでは、生徒達の意見をまとめた資料が5ページに掲載されて

おりますので目を通しておいってください。

全工事費を約1000万円とし、いかに低コストで工事を進めていくかは、僕に全てお任せ下さい。

それでは、校長、後の会議の進行を宜しく願います。」

そう言う翔太は、翼の隣に用意されてある自分の椅子へと戻る

「うゝすごい緊張したよゝ・・・・。」

翼の耳元で皆に聞えぬよう小さな声で話す翔太は、もうすでに完全OFFモードの翔太に戻っている

「緊張感見せず、相変わらず完璧だった。」

正直な感想を言ったまでのなのに。またまたゝとおどけてみせる翔太を見るとまだ自分の完璧さに気付いていないらしい

完璧な翔太と違ってオドオドと少し戸惑っている校長の姿はやはり翔太の後だと見苦しい

長々とした会議が終わったのはもうあれから1時間近く経った頃だった

「以上、会議を終了します。」

疲れの溜まった表情で情けなく校長が吐くと皆一斉に立ち上がりリラックスし始めた

「はあく相変わらず会議って疲れるよ」

会議室内まで持ち込んだラケットのガットを調整しながらあくびをする翔太

「俺なんて朝からずっと会議詰めだぞ。」

「本当翼毎日ご苦労さんだよ……
……ってそうだ、ヒロって本当に生徒会に入ってくるんだ
ろ？しかも副生徒会長なんてよくやるよな」

それは、翼も驚いていた。生徒会に入るには翼からのスカウトか生徒達の推薦が無いと入れない
仮に生徒会に入れたとしても最初は皆雑用係として使われる、いきなり副生徒会長などとは過去にない例だった

「それにさあ、ヒロが生徒会入ったの涼子ちゃん狙いなんだろう？翼
大丈夫かよ？」

「涼子は俺専用のペットだ、誰にも譲る気など微塵も無いから安心
しろ。」

勿論涼子を取ろうとする相手がヒロだろうと容赦はしない。

「ハハハ！翼ならそう言うと思ったよ、
あ！でも一つ忠告ね？あんま涼子ちゃん虐めると嫌われちゃうよ？」

何処かで聞いた事のある台詞、それは、今日亮に言われた言葉と全く同じものだった

「俺ってそんなに涼子虐めてるか………」

一人呟く翼だった

(29) (後書き)

評価・感想をして頂けると作者の原動力になります。

(30)

ピンポン・・・

突然のインターホンに驚きバスローブを羽織り涼子は慌てて玄関に向かう

やっぱり授業サボっちゃったから、担任かなー?!

少し緊張した面持ちで確かめるようにゆっくりとドアを開ける

「何警戒してんだよ。」

涼子は大きく目を見開き口を大きく開けた

そこに居たのは、担任などでは無く、なにやら厚い資料を持った翼だったからだ

「なっとななに・・・にゃによッ?！」

先程の事を思い出すと口が上手く回らなく思わず咬んでしまう

「プッ・・・!」

悪いと思い下を俯くが結局、吹き出してしまう翼

「わっ・・・笑わないでよお・・・っ／／／／」

涼子は顔を真っ赤にさせ、小さな声で吐くように言う

「悪い、悪い。」

「……………で、ご主人様を立ち話させる気か？」

相変わらず美男子眼鏡ご主人様は、無茶苦茶な事を言い出す。

「へっ部屋まだ、片付いてないし……………それに……………」

生徒会室でされたような事を、再びされたら今度は確実に自分が自分で無いようなあのおかしな感情に飲み込まれてしまう

そう考え言い訳をしようと翼を見上げた時

「安心しろ、何もしない。……………多分。」

そう言うと、涼子の体を抱きかかえあっさりと部屋に入ってしまう

「いつ嫌あッ！……離してっ！ちよつと馬鹿降ろしてよッ！……」

バスローブの下は下着だけで、抱きかかえられると今にも見えてしまいそうなほどで涼子はパニくる

「ッ？！おいッ！馬鹿暴れんなって分かった！降ろすから！！」

あまりの涼子の抵抗にしぶしぶ翼は涼子の体を優しく地面に置いた

「で……何しにきたのよ……」

乱れたバスローブを直し、きつめの口調で涼子は尋ねる

「ペットのしつけ。」

翼は、それが当たり前のような顔をして涼子にじつと熱い視線を送る。

「明日から、ヒロが副生徒会長に就任する……しかも俺と同じ部屋になるそうだ。」

涼子は昨日黒木が言ったことを思い出し、本当だったんだと少し驚いた

「そうなれば当分しつけの時間が無くなる。だから今涼子を一から十まで手取り足取り厳しくしつけしてやるよ。」

制服のブレザーを脱ぐと翼はベッドの上に座り手招きをする

「なっつななな／＼／＼何する気よ????!」

気が気でない涼子は声が裏返るのも気にせず後ずさりする

もう頭の中は真っ白で今にも気絶しそうな程の涼子

「何怯えてんだよ？早くしろ。まず礼儀作法から教えてやるよ。」

「え？」

礼儀作法・・・・・・・・

??

啞然とした涼子を見て翼はニヤリと笑った

「しつってて礼儀作法の事だぞ？なに変な事考えてたんだよ涼子？」

「?!!!////」

涼子は、凶星を突かれ恥ずかしくなり真っ赤になった顔を背ける

「それじゃあ、今日はしつじゃ無くて、涼子のお望み通り“調教”に変更してやるよ。」

涼子は体を固くし、今着ている薄いバスローブで必死に体を隠そうとする

しかし、涼子は気付いていた心の何処かで期待している自分に……

(3 1)

「脱げよ。」

「ッ???!!!!! / / /」

ゆっくりと立ち上がり涼子の方へと接近して行く。その時涼子はあ
る事を思い出した

不運にも今日の下着は愛くるしいアヒルさんがプリントされている
パンツに青色水玉のブラ。

「ッ……嫌ッ!駄目ッ!!!!!!」

やはり好きな人の前では可愛らしい下着でありたい。そんな涼子の
乙女心が翼を拒む

「何でだよ、これが涼子の望みなんだろう?」

涼子に拒否されて少しショックを受けた翼は不満そうに吐く

「今日は駄目なのッ……!!だって今日は……………」

下着が変だからなんて恥ずかしくて言える訳も無くただただ迫って
来る翼を拒む涼子

「今日は、アヒルのパンツだからか?」

「そうッ……………上下バラバラだし……………ッて?!!!!!!!」

．．．．． な．．．．． なななんでそれを．．．．．ツ
「！！！」

すると涼子はバスローブがはだけ、下着が露になっていることになった今気付く

「そんな事心配してたのかよ？俺拒まれて傷付いたんだぞ？」

翼は、ぷくうつと頬を膨らませ、そつぽを向いてしまう

その姿は凄く愛らしくて、普段とは違う一面というか。
なんとも母性本能をくすぐるような子供らしい翼の姿を見て、涼子は抱きしめずにいらなかった

「涼子ツ．．．．．。」

翼が振り向けば涼子の柔らかい胸があつて、心地良い体温が翼を抱きしめる

「涼子、目閉じろよ．．．．．。」

耳元で囁くあの甘い声は涼子をクラクラに酔わせ、魔法にかかったように、涼子は言われた通り目を閉じた。

目を閉じて何も見えないせいか、翼に触れると涼子はいつもより敏感に反応してしまう

「ツ．．．．． アアツ．．．．．あ／／」

感触で翼の手が涼子の胸に触れてる事が分かる、驚いて目を開けても何かに視界をさえぎられ何も見えない

それだけでは無く手、足共に何かに縛られ自由がきかず、抵抗することさえ出来ない

「やめてッ!!・・・ちよっ・・・っ・・・ばさ・・・
何して・・・ッ。アア・・・アッ／／／」

「涼子の喘ぎ声もつとよく聞かせるよ。」

涼子が精一杯抵抗しても逆効果で余計翼の手はバスローブの奥へ奥へと移動する

再び、あの気が変になりそうなくらいのもどかしさが涼子を襲う

「嫌ッ・・・!や・・・めてっ・・・離してっ・・・
アっ・・・アッ／／／」

「もうこんなに固くなってるのに? 涼子の体は俺の事欲しがってるようにしか見えないがな。」

すでに固くなつた涼子の胸の突起を、慣れた手付きで押したり撫でたり甘噛みしたり。

翼はニヤリと微笑を含ませながら最後のラストスパートに差し掛かった

涼子のパンツにプリントされている愛くるしいアヒルと目が合い翼は笑いそうになったが

必死に堪え、下着のラインにそって指を滑り込ませた。

左手で胸を愛撫し、右手では、まだ男を知らない涼子の未知の部分を手探りで探し始める。

「んッ……あア／／ふアッ……ツ／／」

涼子は、声を漏らさないよう必死に口を閉じている。

そんな涼子も愛おしくて、愛らしくて、そしてめっちゃめっちゃにやりたくて。

自分もかなり限界に近い状態だったが、もつと涼子を虐めてやりたくて、わざと涼子の感じる所を外して攻めて行く。

指から伝って流れ出ていく涼子の液は、翼の指を次々に飲み込んで行く

もう抵抗するのを諦めた涼子は、そのもどかしさのせいか体をくねらせ、感じる所へ指を導こうとする

「翼様お願いします、もつと気持ちくして下さい……って言うたらイかせてやる」

何処までもSな翼は、今にも頂点にいきそうな涼子から指を抜くとペロリと涼子の液を味わった

「そんな事っ……誰が言うもんかッ……／／」

何処までも意地っ張りな涼子は、強がりと言う

思った通りの言葉が返ってきて翼はまた笑いそうになるが、涼子にバスローブを着せた

「んじゃあ、調教終了。」

素直じゃない涼子にまた意地悪をしようと翼は、ベッドを降り部屋を出て行く素振りをする。

何も見えない涼子は、音だけで翼が今何処にいるのか把握しようと息を殺して耳を済ませた。

ベッドから軋む音が消え、玄関の戸がボタンと閉まる音が聞える。

「つばさ・・・・・・・・ツ？」

シーンと静まり返った部屋の中に翼からの返事は無い

まだ、翼の体温が残っているベッドから起き上がると手足の自由を奪っていたバスローブの紐を解こうと体をよじる

「翼の馬鹿ツ・・・・・・・・女の子一人にするなんて・・・・・・・・本当最低ッ！」

そんな悪口を呟きながらも、翼が居ないこの部屋で寂しさを隠しきれずこぼれ出した涙が頬を伝う

手足に結ばれていたバスローブの紐を解き、視界を隠された紐を解こうと涼子が紐に手を掛けた時

「誰が最低だつて？」

聞えるはずの無い声が横から聞え急いで目を塞いでいた紐を解く

「つ……ばさッ……何で此処にッ……」

今までの事を見られてたのかと思うと少し恥ずかしくなり目は合わせない

「涼子が意地っ張りだから虐めてやりたくなつた」

意地悪な笑みで優しく涼子を包み込む翼

涼子の髪を優しく撫でながら、ずっとこのまま時間が止まればなんてありえない事を考えてしまう翼だった

(3 2) (前書き)

更新遅れてすいません、テスト風邪などで小説の進み具合が遅れましたが、どうかこの小説を最後まで応援お願いします。

(3 2)

「んッ・・・・・・・・っあ・・・・・・・・／／っ・・・・・・・・ばさッ・・・・・・・・！」

「涼子声我慢しなくて良いよ、俺もつと涼子の声聞きたい。」

そう甘く囁と翼は、優しく涼子を抱きしめる

初めて大切にしたいと思ったたった一人の女

何があっても。たとえ、ヒロにだって一生涼子を放さないと翼は、この時心に決めていた

「ッ・・・・・・・・やっぱこれ以上駄目ッ・・・・・・・・／／／／」

制服のズボンに手を掛けていた翼の手が止まる。涼子がもじもじと恥ずかしそうに下を俯く。

「あっ・・・・・・・・あたし・・・・・・・・初めてなのッ・・・・・・・・／／・最初は痛
いってゆうしッ・・・・・・・・それで・・・・・・・・えっ・・・・・・・・と・・・・・・・・」

処女の涼子にとって、何もかもが初めての経験。当たり前前に恐怖感はある。

「ごめん涼子、少し焦りすぎたな。調教は此処まで。」

おでこにキスをする、涼子の再び乱れたバスローブと自分の衣服の乱れを正す。

「ごめん翼つ……………」

初めて会った時では、絶対考えられないようなしょぼくれた顔して上目遣いで目をつるつるさせている涼子を見て

翼は理性と本能が抑えきれなくなるのを歯を食い縛りながらも必死で抑える

「良いんだよ、まだ時間はあるから、この先俺が居ないと生きていけないくらい激しい調教をしてやるから」

まだ恐怖感に捕らわれている涼子の気持ちを和らげる様に冗談ばい笑みを浮かべる翼

これ以上居ては、涼子が無理矢理犯しかねないと直感した翼は足早に玄関先へと向かう。

その時後ろから、細くて小さい涼子の体が重なる

「え…………と／／つつ次は、その……………さつ……………最後までして大丈夫だと思うから……………／／／／」

細い腕を翼の腰に回し、しばらく2人はその状態で時が止まったかのように立ち竦んでいた

..... 望目線

「この範囲が今回のテストに出るからよく復習して置くように・・・
・じゃあこれで授業を終わる。」

キンコーン

カーンコーン

いつものようにチャイムが鳴る3秒前に終わる英語の授業

望はあくびをしながらぼんやりと窓に視線を移す

何処までも果てしない青い空にこの身全てを任したくなるような澄
んだ青い空

窓ガラスに映っているのは、いつも通り大きな赤いリボンをした一
人の少年の姿

「僕、何で男らしく生まれてこなかったんだろう。」

初めてのこんな感情を持った望

今まで自分の女らしい外見は嫌いじゃ無かったし、
女よりも男が好きだったから毎日女の子らしくして周りのみんなか
らチャホヤされるのは悪い気はしない

なのに、たった今望は自分の極度の女顔を恨んだ

自分でも良く分らないが昨日の夜から何処かが狂ってしまった

突然現れ、翼のペットとなった涼子に敵対心を燃やした望は少し驚かせてやろうと

昔の悪友たちに少し虐めて欲しいと連絡した

もちろん最後までやるつもりは無かったし、涼子が泣き崩れ生徒会を辞めるのを望んでいたが

涼子の態度は恐怖感を浮かべず堂々としていた

そんな涼子を何故だか自分の手で虐めてみたいとゆう初めての感情が湧き上がってきたのだ

周りに居た悪友たちを部屋から追いだし、2人になった部屋の中で望の妄想は膨らむ

女には全く興味が無かったはずの望だったが“もつと触れてみたい”という思春期の男子らしい無邪気な感情が表れた

涼子に触れるたびに心臓の音が高鳴り、未知の場所へと探検している子供のような気分になった

翼に見つかった時は本気で焦ったが、それよりも涼子の体へもつと触れてみたいという感情の方が数十倍強く

部屋に戻ると、望は初めて一人でしてしまった

床に散らばるたくさんのティッシュに、行偽の後の激しい罪悪感

ピンポーン

ピンポーン

少し荒いチャイムが鳴る、大体は予想していた望急いで乱れた服を直し玄関へ向ける

「はあい。だあれ？こんなじかにイ」

いつもと変わらないようにわざと望が返事をした

「よお望。」

「・・・ツ？！！ど・・・どオしたの翼？こんな時間にイ・・・」

一瞬驚いたそ素振りをして、再びまた平然とする、全て望の計算通りだった

「俺に慕うべき者が俺のペットを虐めちゃ駄目だろ？」

いつも翼を見ていたからか想像通りの言葉が返ってきて少し驚いたが、望は再び演技を始める

翼の威嚇に驚いたフリをし、ドアを閉めようと手を掛けた時

「ツ・・・？！！！」

翼の手が望の手をグッと掴む。爪が食い込み望の腕からは一筋の血が流れた

「今日からお前を解雇する。寮も普通寮へと移す。」

これは少し望の誤算だった、此处まで涼子を想っている翼を見て

僕もこんなに人を愛してみたい

と思うようになり、ただただ下に落ちる自分の血を眺めていた

(3 3)

日が沈み始め、部屋の中にはオレンジ色の日差しが差し込む

オレンジ色の日差しを浴びた部屋の中には、翼の温もりの中で昨日と同様静かな寝息を立て眠ってしまった涼子の姿

「相変わらず無防備な奴……。」

白く透き通った肌に綺麗な紅色の荒れの知らない唇は、翼の欲望を掻き立てる

）
）

「ッ??!!!!」

その綺麗な唇にそつとキスをしようと涼子の顎を持ち上げた時、翼の制服のブレザーのポケットの中で最近はやったCMソングの曲が流れた

涼子を起こさぬよう素早く携帯を取り出し、サブディスプレイを見る

メール受信

- - - - -

ヒロ

- - - - -

今一番見たくなかったライバルの名前

少しためらったが思い切ってメールの本文を開く

- - - - -

今翼の部屋の

前なんだけど

翼何処にいる

んだよ？

- - - - -

携帯を思わず落としそうになりながら、慌てて部屋を出ようと靴を履き替えた時

ピンポン・・・

案の定インターホンが鳴る、カンが強いヒロの事だ、涼子の部屋にいるのだろうと直感したのだろう

「翼あ？！いねーのかあ？！涼子も一緒なのかー？！」

涼子がまだ寝ているとゆうのにお構いなしにドアを叩き始めるヒロ

このままでは、涼子は起きてしまう・・・しかたなく翼はドアを開けた

「ッ??!! やっぱ此処に居たのかッ!!」

「ヒロ静かにしろ。涼子がまだ寝ている。」

ベッドの上に寝かせた涼子をチラリと見て、まだ眠っている事を確認した後翼は静かにドアを閉めた

「とにかく、俺の部屋に入れ。」

廊下で騒がれても困るのでしぶしぶ翼を部屋の中に通す

「コーヒーでいいか？」

綺麗に片付いたキッチンへ向かうとカップを戸棚から取り出す

一人で住んでいるわりにはやけに広い翼の部屋はヒロと住んでも充分スペースが余るほどだ

大量の荷物を部屋の隅に置くとヒロは、一息ついて深刻そうな顔をする

「お前、涼子とやったのか………？」

やはり、ヒロにとって一番気になる場所だった

男女が同じ部屋にいて、何も無いはずが無い
更に、涼子はバスローブ姿でベッドに眠っていたのだ。何も無いとゆうわけでは無いだろう？そう言わんばかりにヒロの視線は真っ直ぐだった

「・・・・・・・・勘違いするな、あれはただの調教にすぎない。」

翼のすました顔はヒロの拳に力をいれさせた

「お前いい加減にしろよ・・・・・・・・？何でも調教だの、お仕置きだの涼子は何だと思ってんだよ？！！！」

涼子を愛するヒロにとって、それは面白くない事でもあるし、何よりも涼子を守れない自分が悔しかった

「涼子はただの暇つぶしのペットにすぎない。」

力の入った拳に翼は気付いていたが、火に油を注ぐように更に挑発を続ける

「ッ！！！！・・・ざけんなッ！！！！涼子は本気だと思ったのによ！！・・・やっぱお前はロボットだ！！！！」

怒り狂ったようにヒロは翼に殴りかかる。

そして、何発も何発も思い切り翼を殴った

「・・・・・・・・俺ロボットなんだろう？ロボットなら痛みすら感じない。それにヒロ、お前腕落ちたな。」

顔に大きなアザを沢山作ってもまだ、あの冷静な翼がいた

- - - - - 涼子目線 - - - - -

「ッん．．．ん．．．」

涼子が眼を覚ませば、暗闇の中でバスローブ姿の自分

また寝てしまったんだと後悔しながらも翼の姿を探す

「あれ．．．もう部屋に戻っちゃったのかな．．．？」

少し残念そうに肩を落とし、翼といったベッドに再び横たわる

次の瞬間、ガラスが割れるような物凄い音が耳に入った

「ッ????!?!」

ただ事では無い、隣からは誰かと口論するような声と物を壊す音だけが聞える。

靴も履かず急いで部屋を出る、そして翼の部屋の扉を勢い良くあけた

「涼子ッ?!?!」

目の前には、ヒロに跨り、殴っている翼の姿

「・・・・・・・・・・なに・・・・してるの・・・・・・・・・・?」

2人共顔や足に大きなアザがり、ヒロに至っては口や鼻から血が出ている

「翼やめてッ！ヒロが死んじゃう！！！！ヒロから降りて！！！！」

すでに半分意識が無いヒロに急いで駆け寄る涼子

「ペットは、ペットらしく主人に大人しく仕えていれば良いんだよ。」

「

ヒロの側にいる涼子を見て翼はいらだちを隠せないまま言う。

「ッつば・さ・・・・お前ッ・・・・涼子は・・・・渡さないッ・・・・」

「

半分意識を失っていたヒロは傷付いた体を無理矢理起こす

「駄目ッ！ヒロ無理しないで！」

見ていられない程傷付いたヒロは、翼の凄さを物語った

「・・・・・・・・・・」。

何も移さない翼の冷たい視線は一度涼子に移すとそのまま無言で部屋を出て行ってしまった

「・・・・・・・・・・涼子ッ・・・・・・・・翼のペットなんてやめろ・・・・・・・・ッ・・・・」

・
・
」

苦しそうに顔をしかめたヒロの顔が涼子の涙によってぼんやりと視界をさえぎっていた

(3 4)

あんなにも優しい瞳をしていたはずの翼が・・・・・・・・？

涼子は昨夜あつた事をぼんやりと考えた

昨日の出来事は涼子自信もショックが大きすぎてよく覚えていない
ただ、目の前の傷付いたヒロを助けようと、黒木に連絡したところ
までは涼子も覚えていたがその後から記憶が無いのだ

今はただ、机に向かい誰も居ない隣の席をぼんやりと見つめていた

昨日の夜翼とヒロの間に何が起きたのだろうか・・・・・・・・？？

「ツつば・さ・・・・お前ツ・・・・涼子は・・・・渡さないツ・・・・」

傷付いた体を無理矢理起こしながら呟いたヒロの言葉

あれはどういう意味だったのだろうか・・・・・・・・？

考えれば考えるだけ頭が混乱の渦に巻き込まれついに考えることに
疲れた涼子は机に頭を突っ伏せる

「もう訳分かんないよおつ・・・・・・・・」。

昨日はあんなにも幸せだったはずなのに・・・・・・・・

キンコーン
カーンコーン

授業もまともに聞けないままただ時間が過ぎ、もう1限目が終わってしまった

そんな涼子の姿を見て心配そうに女子生徒たちが声を掛けてくれるその度に多少元気は出たが、やはりヒロと翼の事が気になってしかたがない

「涼子ッ！望様が呼んでるわよ！」

カナは涼子の体を起き上がらせドアの方へと指差す

そこには、いつもどおりあの大きなリボンをした望が笑顔でヒラヒラと手を振っていた

「何の用・・・？」

この間された事もあってか、少し意識しすぎて自然と素っ気無くなってしまう

「もオ警戒しすぎだよりょうちゃん・・・
まったく・・・翼とヒロの事教えてあげようと思ったのになア」

人差し指をくわえ少しむつと顔を見ると望は意地悪っぽく笑って見せた

「ッ?!翼とヒロの事・・・・・・・・??」

「そぞ昨日なにがあつたか教えてあげるよオ
ここじゃア何だからア屋上行こオ?」

いつもの望とはいえやはり、警戒は解けない屋上で二人きりになる
のはさすがに危険だと直感しながらも
体は正直で翼とヒロの事が気になって気がつけば望に付いていつて
いた。

「で、昨日ヒロと翼の間に何があつたの?!!!」

古びた屋上の手すりに手をかけ、なるべく強い口調を保つ

「本当に気付いてなかったんだア?りょうチャンさアやつぱ鈍感つ・
・
あのねヒロと翼はりょうチャンが好きなのツ・・・・だから2人で喧
嘩しちゃ・・・・」

「え?!」

涼子の間抜けな声が乾いた鉄コンクリートの屋上に響く

「ヒロとつツ・・・・翼がアタシの事をツ・・・・?!!!」

天然な事は知っていたがここまでだとは思わず、望は悪いとは思いつ
ながら吹いてしまった

「本当鈍感ツ・・・・」

じゃア・・・多分僕の気持ちもりょうちゃん気付いてないだろうな
ア・・・
も才本当困っちゃうよオなんで僕こんな人を好きになっちゃったん
だろオ・・・」

「へ?!!!」

再びあの間抜けな声が啞然とした涼子の口から漏れる

「やアっぱ気付いてなかったんだア・・・
ねえりょうちゃん?翼なんてやめて僕にしない?」

大きな望の瞳は真剣そのもので今にも吸い込まれそうだった

「っただだっで・・・望君は同性愛者で・・・翼の事が好きで
ッ・・・それでっそれでっ・・・」

涼子の頭の混乱はますます酷くなりもう何もかもが真っ白

「うゝん・・・前までは男が好きだったんだけどオ
こないだの事件で僕りょうちゃんの事が好きになっちゃった」

茶化してはいるものの、望の顔は真剣でこんな美少年に見つめられ
てはさすがの涼子もドキッとしてしまう

「俺にしとけよ涼子。」

頭に付けている邪魔な大きなリボンを取ると望は涼子の後ろの壁に
手を当て逃げられないようにする

「嫌ッ．．．離して望君約束したじゃないっ．．．もうこんな事はしないって．．．」

「良いの？そんな事言っていると前みたいに無理矢理しちゃうよ？涼子も嫌だろ？だったら、早く俺の物になれよ．．．」

「．．．っ．．．つばさ．．．ッ」

何故だろうか？

こんな時にはいつも翼の顔が浮かぶのは．．．？？

翼は乱暴者で、強引で昨日だってヒロが酷い目にあつた

けれど、心の奥ではいつも翼を想っている、

だって私は．．．

「私は翼が好きなのッ！！！！」

「こんな所で告白とは、流石俺の涼子だ。」

「ッ???!!!!」

屋上のドアから出てきたのは今一番居て欲しくなかった人物

「翼ッ?!!!何で此处にッ・・・・・・?!!!」

「よお望、もう約束忘れたか? 良い度胸じゃねえの。俺の涼子に手を出すとは。」

昨晚のアザが痛々しく残る翼の顔には、ハッキリと怒りと悲しみの入り混じった表情を浮かべていた

「まったく、困ったもんだ、なあ副生徒会長さん、この問題児どうしたらいいと思う?」

「え・・・・ッ?」

なんと翼の後ろから顔を出したのは、沢山の包帯を巻いたヒロの姿だった

「うゝんこれは困りましたね。」

何らかの処分を下しましょうか生徒会長サン。」

優等生ぶった口調で翼と話すヒロは昨日あった事件を忘れそうにな

るほどだった

「それは後にして、ちゃんと聞いたかヒロ？涼子は俺が好きだよ。」

翼は涼子とヒロを交互に見てニヤリと笑顔を向ける

啞然としていて忘れていたが先程自分の言ったことを思い出すと涼子は顔が真っ赤になった

「まったく、何だよこんなSな生徒会長何処が良いんだよまったく。」

呟くように言うと不機嫌そうに口を紡ぐヒロ

「涼子、今からお前を解雇する……………」

そして今から涼子はこの俺様の彼女に任命する。」

「へ……………」

「何？こんなクサイ台詞を俺にもう1度言わす気？」

見上げればあの冷静なはずの翼の姿は無く、顔を真っ赤にした一人の青年

「翼にいじめられたらいつでも俺の所に来いよ 俺キープでも全然平気だし」

「キープ？！そつ…………それより…………翼とヒロは昨日喧嘩して…………えっ？違うの…………？」

いろんなことが一気に起こりすぎて混乱してしまう

「バーカ……昨日の事なんてもう忘れたよ、俺等基本仲良いし」

ツッ……!!? 人騒がせにもほどがあるよッ……!!

ほっとしたような、びっくりしたような涼子は気が抜け床に倒れこんでしまった

「おいッ……!! 大丈夫かよ涼子っ……!!」

「こっ……腰抜けちゃった……」

うっ恥ずかしいノノ何やってんのよアタシノノ!!

穴があつたら入りたいという言葉を始めて実感した涼子だった

「ったく……相変わらず手のかかるやつだな……」

「ひゃッ?!!!!ノノノ」

翼は涼子をひょいと持上げると、屋上のドアに手を掛ける

「つつ……つばさ!! おろして!!ノノアタシ重いし大丈夫だから……!!ノノ」

涼子はもう緊張と恥ずかしさで気が気でない

「俺がこうしたいからこうしてんの、文句ある？
それと・・・ヒロ全校生徒体育館に集めといてヒロの副生と会
長就任式やるから」

軽く舌を出すと翼は、悪戯鬼のような笑みを浮べてヒロと望を屋上
に取り残す

「翼っ降ろしてよっっ／＼パンツ見えちゃうっ！！」

涼子の抵抗は尚続き翼も翼でムキになって降ろそうとしない

「俺の彼女なら彼女らしく大人しくしてろ。体育館まであともう少しだ」

涼子が顔を上げると目の前にはもうすぐそこに体育館があった

「はい、了解しました手の掛かるお姫様のご希望に添いますよ。」

小さく溜息をつく翼はスネた子供のようにしぶしぶ涼子を降ろした

「翼のバカ・・・／＼早く降ろしなさいよ、もうっ・・・／＼」

本当はもっと、こう“ありがとう”とか“ごめんね”とか、気の利
いた言葉を掛けたかったが、

なかなか口が開かずについ、憎まれ口を叩いてしまう

「そんな事言っただけなんだ、彼氏に。」

「ひゃっ！？／／」

翼は涼子の顔を持上げるとぷにっどホッペをつかむ

「ッ／／何すんのよ馬鹿ッ！！！！」

．．．．．／／／／

キスされるかと思った／／／／

そんな風に自惚れていた自分に恥ずかしくなる

「開けるぞっ．．．．．」

建てつけの悪い体育館のドアを開けるとそこには．．．．．

「ッッ???!?!?!」

最終話

「「「おめでとーございますっ」「」」
え……っ??

めがくらむような眩しい日差し、目が馴れるまで数十秒の時間を要したが

だんだん馴れてくると、うつすらと見える大きな花束

目の前にあった鮮やかに彩られた綺麗な花束は
ヒ口によって手渡される

「あーあ、本当は副会長就任式だったのにな」
せつかく昨日涼子を奪うシナリオ考えてたのに」

花束と同時に渡される何かのしおり

開いてみるとそこにはびっしりと予定が書いてあった

涼子がステージに登段

「俺の彼女になってください」(真剣に涼子の目をしっかり見て)
「ざわめき」

(涼子は少し恥ずかしそうにこくりと頷く)

BGM

「?!?!?!?!?!// // // なっッ何よこれ!」

「ハハッ翼から涼子を奪うぞ作戦」

うわッネーミングセンス無いッ

「いまからでも遅くないよ

翼なんてオジサンくさい奴やめて俺にしなよ

翼より俺のが優しいし頭いいし運動もできるし」

「おめーまだ諦めてなかったのか、悪いけど俺の物なんでね」

ぎゅっと力強く抱きしめると

翼はステージに昇る

「ちょっと下ろしてよッ翼ッ／＼／」

「綺麗に飾り付けされた体育館にお前が持つてる大きなブーケ意味わかる??」

「へ??」

卒業式でもないようだし…えっと…

「結婚式だろ」

「は?？」

よく見れば後ろに

芳賀夫妻御結婚おめでとぅございます

と書かれている

やけに準備の整った式だ

10分15分で用意できるとかとはもはやレベルが違う

「夜から業者を呼んで作業を始めてたんだぞ」

「え??」

「一応ヒロを選んだら困るから神田夫妻御結婚おめでとぅございますバージョンも作ってたんだけどな」

「えっええ??!!」

「望はちよつと悪い役与えちゃったけど、相変わらず名演技だった

ぜ
」

「ありがと翼っ
」

望まででてきて私の頭の中は真っ白だった

「ええっ???!?!みんな私を騙してて私がどっちかを選んでええ?
???!?!?!」

「ちよつと黙ろーかお嫁さんは可憐で優雅で上品んな者だろう??」

「ええ???!?!?!でも私はえつと騙されててえええ???!?!?!」

そんな黙っているなどできるはずもない

「涼子みんなが見てるまえでお仕置きされたい?」

「ッ???!?!?!?!?!?!」

につこりと微笑む

てゆか目が笑ってないッ!?!?!

「よし良い子だね」

泣く子も黙る芳賀翼というのはこう言う事だろう

いや今私が勝手に作っただけだね??

「えーっ おっ ほん静肅に」

えっ????!!!!

ヒロッ?!!

目の前には神父の格好をしたヒロがたっていた

ご丁寧に白ヒゲまではやしている

「ぷ」

私は悪いと思って我慢してたのに翼はお構い無しに大爆笑

「はははッ!!!!ぷぷ似合ってるぜっ!!」

またこの子は心にもないことを

「笑うな翼っ！……賭けに負けたかと言ってもこんな屈辱………涼子は俺が貰ってく」

「え??」

中に浮く私の体

「おっおい！！！！」

翼の声がする

つてええええ???!?!

駆け落ちする花嫁の図がはつきりできている

「おろせバカ
ッ」

まだまだ私たちの慌ただししい日が続くようです

最終話（後書き）

やっと終わりました

俺だけのセンセイも観覧くださると嬉しいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7071d/>

生徒会長のSはSのS

2010年10月15日22時06分発行